

第5回 むのたけじ反戦塾 手元資料

むのたけじ 100歳の集い

2015.3.8(sun)



ジャーナリズム・ メディアの再生

～戦後70年・未来への課題～

「埼玉・市民ジャーナリズム講座」実行委員会
埼玉新聞サポーターズクラブ
日本機関紙協会埼玉県本部
NPO法人埼玉情報センター
さきたま新聞

第5回 むのたけじ反戦塾のご案内

「むのたけじ反戦塾」は昨年12月に第1回を開催して以来、これまで4回の学習会を行ってきました。

むのたけじさんが語り、書き遺してきた「戦争はいらぬ戦争をやらぬ世へ」、反戦への思いを手がかりに、参加者がそれぞれ自分が今、考えていること、とく戦争の危機に対して「何とかしなければ」と考えていることを出し合って、話し合うという形で進めてきました。

そうしたみんなで作っていく学習会の形を、これからも大切にして続けて行くつもりですが、来年1月の会（第6回）から少し会の進め方の形を変える工夫をしていきたいと考えています。

今回、第5回は、いつもの話し合いに加え、この先どのように学習会の形を工夫していくか、参加いただいたみなさんといっしょに考えて行く会にしていきたいと考えています。

- 日時 2023年11月23日（木・祝）
13時30分～16時50分
- 会場 文京区民センター
3C会議室

第5回 むのたけじ反戦塾

日時：2023年11月23日（木・休）
13:30～16:30

会場：文京区民センター3C会議室

（地下鉄春日駅2分・後樂園駅5分）

プログラム（予定）：

- ① 参考上映「むのたけじ100歳のつどい『ジャーナリズム・メディアの再生～戦後70年・未来への課題』」（66分）2015年4月制作
- ② 参加者、それぞれが今考えていること、問題としていることの出し合い・話し合い
- ③ むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中に』第三章「人類の余命は四〇億年か、四〇年か」から
- ④ 「むのたけじ反戦塾」の新しい展開をめざして

【この手元資料の内容】

- 資料① 第5回 反戦塾へ
・これからの「むのたけじ反戦塾」の工夫
・第5回 反戦塾へ P.2
- 資料② 「希望は絶望のど真ん中へ」へ思い P.3
- 資料③ 「むのたけじ反戦塾」これまでのあゆみ P.3
- 資料④ 第4回むのたけじ反戦塾
（2023年8月26日）参加者発言記録
P.4～11
- 資料⑤ これからの「むのたけじ反戦塾」
「憲法を考える映画の会」 P.12
インフォメーション
- 資料⑥ 「希望は絶望のど真ん中に」
第3章人類の余命は40億年か、40年か
P.20～13（左開き・裏表紙から）

むのたけじ反戦塾

問合せ先：090-4599-5314
〒338-0006 さいたま市中央区八王子
4-7-10-201
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp



これからの「むのたけじ反戦塾」の工夫

岸田政権の評判がすこぶる悪く、いつ倒れて、次の政権に変わるか、国民の多くは期待を込めて見ているようです。

何もなくても、自滅しそうだからです。

しかしこういふ時こそ、危険な状況です。

安倍、菅、岸田政権の間に決められた戦争に向う政策は、今も着々と、というか、ますます強引に、官僚の手によって押し進められているからです。

その危険をマスメディアは報道しようとしません。

ちょうどガザで殺戮が始まったとたんに、ウクライナの戦争の話題が、ほとんどなくなってしまったように。

このような時こそ、私たちは見過ごされているものに、あえて目を向け、それぞれの考えを出し合い、たとえ小さなものであっても、それを声にしていくことを続けなくてはならないのではないのでしょうか。

そこで「むのたけじ反戦塾」では、これまでの5回の学習会でやってきたことをもとに、次回から、会の進め方を少し変えていく工夫をしていきたいと考えました。

新しい一回りに入る2024年、いわば「第2期」の「むのたけじ反戦塾」です。

その「改革」の内容は、11月23日に参加者のみなさんと意見を出し合っています。いまのところ、こんなことを考えています。

1) むのさんの「著作」「出演している映像作品」を一緒に見ながら、その感想、学ぶところ、およびそれぞれが今思っていることを出し合い、話し合うスタイルは今後も続けていく。

2) メインテーマである「反戦のための行動」を、どう自分たちのものにし、結集していくのか、そのオピニオン・リーダーになるゲストにも参加してもらって、それぞれの活動のアイデア、スタイル、めざしているものを話してもらい、一緒に語り合う。

3) 今、候補として考えているのは、

①最近の「反戦」の運動の状況についてコメントを出来る人。

「反戦」関連書籍著者、編集者など

②過去の「むのたけじ地域民衆ジャーナリズム賞」受賞者など

③反戦のための市民活動を個人的にまたグループや団体として活動している人

④むのたけじさんの生前の活動を共にし、むのたけじさんのめざしたものを身近でよく知っている人

④これまでの映画の会プログラム作品の監督・制作者、上映活動を行って来た人などなど

どんな人にどんな話を聞きたいか、一緒に話したいか、その候補を次回はみんなで持ち寄って出し合っていたきたいと思えます。さらに、2ヶ月に1回の定例会を基本とし、その成果報告を情報共有し、会報・NET・映像媒体などを活用して、日常的に「反戦」活動を具体的にするネットワークを作っていきたいと思えます。

第5回反戦塾へ

むのたけじ反戦塾は、第4回までむのたけじが2016年5月有明防災公園で話した、憲法九条が日本の戦後社会に果たした役割などを道標の中心にして、残されたドキュメンタリーや著作などを材料にして話し合いを深めることをしてきました。しかし、むのたけじ地域・民衆ジャーナリズム賞の活動が休止したので、ジャーナリズムと戦争の議論も加えたいと思います。そこで、今回の講演ビデオは、2015年3月8日さいたま市で「市民ジャーナリズム講座」実行委員会主催が主催した「むのたけじ100歳の集い」で、「ジャーナリズム・メディアの再生～戦後70年・未来への課題～」という題で話したものです。

この講演会の裏話をすれば、3ヶ月くらい前にかなりひどい心臓の発作を起こして、休養を経て復帰したもので、講演場所が自宅から車で10分もかからないところにあったからできたものでした。講演の中でも話していますが、最後まで話せるか不安が付きまわって話し始めましたが、この講演会ができたことで、そのあと20回ほどいろいろなテーマで講演会ができました。

そのような事情があったためか、戦後70年を振り返って、自分たちの世代ができなかったことを遺言的に話している感じがしました。

講演はジャーナリズムが生き返れるかということについて話をするのですが、冒頭、このままでは日本ばかりでなく、世界のジャーナリズムは生き返れないと否定的な発言から始まります。ジャーナリズムは今社会がどういふ歩みをしているのか、原因は何か。プロセスはどうか、やがてどういふ歩みをするかの予感を含めて伝え、そいふ問題提起を絶えずして過ちを正していくのがジャーナリズムだからです。

今、2023年11月4日イスラエル軍のガザ市の完全包囲し、パレスチナ人のジェノサイド（集団殺害）が言われ、その悲惨な状況は盛んに報道されています。しかし、そこに至る経過は、たまたまに解説として伝えられることがあるかとは思いますが、普段のニュースではそれが感じられない。

パレスチナ問題の歴史に私は詳しいわけではないが、NHKのホームページを参考に簡単に振り返る。2000年くらい前に今のパレスチナの地にユダヤ人の王国がありましたが、ローマ帝国に滅ぼされ、ユダヤ人は世界に散っていきます。その後ナチスドイツのホロコーストなどの迫害があって、国を作ろうということになります。そこで、イギリスがアラブ人に独立国家の約束をしているのに、ユダヤ人とも国家建設の支持を与えるという二重約束をします。また、イギリスとフランスがパレスチナを統治していたオスマン帝国から取って、分割統治するという密約もします。こうした流れで、国際連合で1947年パレスチナの分割統治案が採択され、1948年アラブ人が住んでいたパレスチナにイスラエルが建国したわけです。それに伴い、自分たちの土地を奪われたアラブ人は黙っていません。三次にわたる中東戦争と言われる戦いをするのですが、アメリカに支援されたイスラエルにパレスチナと呼ばれる地域のすべてが実質占領されたのです。

今の報道を見ると、ハマスがイスラエルに撃った、それにイスラエルが反撃して空爆した、悲惨な状況があるというようなものにしか感じられない。パレスチナの歴史を聴衆はすべて知っているわけでない。毎回解説するわけにもいかないだろうが、そうした歴史を感じられる話し方をしたい。欲しい大事なことがこのことからわかります。

パレスチナは報復合戦しているうちはこの住んでいる人の多くが幸せになることはないだろう。

それは、添付した新聞記事にもあるように元イスラエル兵であったダニーさんも「憎しみ止め、対話を」と訴えている。まさに、むのたけじが訴えている「戦争がいらぬ。戦争のやらぬ世へ」となる。講演の最後に「男女が本気で愛し合えば、戦争のさせない世の中になる」と結んでいるが、それに至る話が講演では続く。

こうした戦争があちこちで起きている時に、第一次世界大戦の直後に生まれて、大正、昭和、平成を生き、戦争を無くそうと訴え続けた人の話を再度聞き直してみると、今を生きるヒントがあるように思います。

武野大策

資料②「希望は絶望のど真ん中へ」へ思い

むのたけじ反戦塾は各個人の考え方を大事にしたいという思いで始められました。そう考えた時、いろいろな読み方ができる、この「希望は絶望のど真ん中へ」という本を思いつきました。しかし、章題に対して事実を書き連ねている本ではないので、わかりにくいところがあります。そこで、この本の理解の手助けになればと、この本の制作過程を述べたい。この本は父の体調が悪くなり、一人で置いておける状態ではなくなり、いわゆる介護を必要としている状態の2010年冬です。ぼんやり過ごしているだけでは勿体無いと、本でも書いたらという提案をしました。それに対して、父からは「何を書けば良い」と返されました。私は父の仕事内容が分かりませんでしたので、そのとき思いつきの答えになりましたが、それで仕事は始まります。その頃父・むのたけじは目が不自由で原稿用紙には書けないので、大量にあった片面コピーした紙に大きな字で書いてもらい、それを私がワープロに入れました。それを私が読んで、父の意見を聞きながら、この「希望は絶望のど真ん中へ」を作ったのです。

最初に父に要望したのは、少し前の集会で質問された「憲法には単に平和を追求するというものだけでない、別の側面がある」という憲法の二重性のことでした。そのことは「序章 歴史の歩みは省略を許さない」に反映されました。ただし、この序章はもっと長い文章をかいていましたので、最初その長い文章を切り分けて課題を見つけて、本を展開しようと思いましたが、私にはそれができませんでした。なお、序章の長い部分は本を作るときに編集者の手で短くなっています。

そこで、私は新たな課題を出します。「考古学を一生懸命勉強しているようだが、それで学んだことを書いては」と言いました。それを受けたのが、「第一章 現在を刺す700万年の歩み」です。この章の最後に、農耕が発達していない三内丸山遺跡と稲作が始まった吉野ヶ里遺跡の違いの話が出てきますか、それから「第二章 農耕の中から何ゆえに戦争が？」が作られます。序章、第一章、第二章までが今までの、すなわちいわゆる過去の話が描かれていると私は理解しています。

そこで、今回添付されている「第三章 人類の寿命は40億年か四十年か」になります。この章では現在残されている克服すべき問題を詳しく書いています。ただ、この章では断定されていないが、そうした克服すべきもので、最も大きなものは戦争だと講演などで話しています。「人類は戦争をやめて、その力を病気と貧困をなくすことに振り向けなければ人類は四十年しかもたない。」と。

実際、ロシアのウクライナ侵略が始まったとき、人類が新型コロナウイルス感染症との戦いと真最中でした。この方法が好ましいか、私は断言できないものでありますが、ワクチンができるまで行動自粛し、ワクチンで免疫をつけて対抗することが地球規模でしたとおもいます。これだけの人数が短期間に一斉にワクチンを打ったということは今までの歴史でなかったことです。だから、それがほんとうに効果のあるのか、世界会規模で検証しなければならぬ時に、ロシアのウクライナ侵略で世界が分断したのです。全世界が協力して新型コロナウイルス感染症に対応しようという雰囲気は無くなりましたね。要因はこれだけでないかもしれないが、生物学研究に従事したものとしては腹ただしく思います。ほんとうに戦争をなくして、病気の克服に努めるべきです。

もう一つ挙げている貧困の撲滅です。確かに、軍備を強めることはお金がかかることです。もしイスラエルが軍備の増強や高い塹を作るお金で、パレスチナ自治区ガザ地区の人々が共に当たり前の生活ができるようにしたらどうだろう。もちろん、ただ資金援助するだけでなく、パレスチナとイスラエルの互いの理解が進ませる努力や信頼関係を構築する仕事なども必要です。それができたら、2023年秋のパレスチナ戦争のようなことが起きなかつたように思います。そのように考えた時、貧困の解決が戦争をなくす方向に向かわせる要素にもなると思いました。

この本の第三章で書かれていることも含め、それを克服するとき私たちが考慮すべきことが「第四章 みんなの課題にみんなで取り組む」に書かれているように思います。「結章 足元から世界を耕す」には、世界の状況のことも書いて欲しいという求めに応じて、アメリカ、と中国のことが書かれたように思います。これが私の考えたこの本の成り立ちです。

私が本格的な本作りを手伝った初めての経験でした。今振り返っても、ストーリー性があるようで、ない。私は承転結がとめられる理系の世界に長くいたので、ストーリー性を求めます。父の思いと一致するかは分かりませんが、このたびなんとカストリーを作りました。しかし、この内容がごちゃ混ぜであるがゆえに、私の経験したことのない膨らみみたいなのがでているように感じます。この本は着手から脱稿まで3ヶ月くらいと短いこともあって、ふしぎでした。そこで、「なぜ、こんなので本ができるのか」と聞いたら、父は「経験があるからだ」と答えた。私にとって、不思議な経験をしたのです。

資料③「むのたけじ反戦塾」これまでのあゆみ

2022年3月21日（休）
むのたけじ 地域・民衆ジャーナリズム賞 受賞の集いプレ・イベント 「映像とお話の会」
■参考映像『むのたけじ100歳の不屈 伝統のジャーナリスト 次世代への伝言』
■お話：今に生きる『たいまつ』の姿勢と思想 佐高信さん

2022年8月21日（日）
戦争はいらぬ 戦争をやらぬ世へ—むのたけじと考える憲法
● 番組上映『まだ101歳むのたけじ—戦争を殺す日まで』
● 「いま戦争と改憲の危機に私達は何をどのように闘うか」
佐高信さん 中垣克久さん 愛敬浩二さん 阿部美紗さん

2022年10月10日（休）
「むのたけじ反戦塾」設立準備会
● 『笑う101歳×2 笹本恒子 むのたけじ』上映
● 河邑厚徳 監督のお話

2022年12月18日（日）
第1回むのたけじ反戦塾
① むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中へ』
② 参考映像『NHKスペシャル「日本人はなぜ戦争に向かったのか」

2023年3月12日（日）
第2回むのたけじ反戦塾
① 自己紹介（それぞれの考えを出し合う）
② むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中へ』第1章「現在を刺す七〇〇万年の歩み」から
③ 参考映像 『100歳、叫ぶ 元従軍記者の戦争反対』

2023年7月6日（木）
第3回むのたけじ反戦塾
① 自己紹介（私の考え）+むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中へ』第2章「農耕の中からなにゆえ戦争が」前半
② 参考映像『100年インタビュー ジャーナリスト むのたけじ』前半

2023年8月26日（土）
① 参考映像『100年インタビュー ジャーナリスト むのたけじ』後半
② むのたけじ著『希望は絶望のど真ん中へ』
③ 参加者、それぞれが今考えていることの出し合い・話しあい

資料④ 第4回むのたけじ反戦塾（2023年8月26日）の記録（1）

※「むのたけじ反戦塾の記録」は、毎回、参加者のみなさんの話されたことを書き起こして、次の回の手元資料に掲載させていただいております。ひとりひとりが、今考えていること、問題だと思っていること、あるいは「戦争はいらぬ、戦争をやらぬ世へ」という反戦への思いを出し合うことが最も大切だと考えているからです。

また、みなさんのお話したことを書き起こし、記録とすることを通して、この「反戦塾」に直接参加していない人にも、みなさんが考えていることを伝えていくことが出来ると考えてます。

しかしながら、録音したものの書き起こしているのですが、採録者の知識と教養の無さから、よく聞き取れなかったり、わからなかったりしたところがあります。採録しながらもこれは間違いではないか、と思いながら文字起こしているところ（？）や（***）で表示）があります。

ご自分の発言と思われるところで、間違いがありましたら、お知らせ下さい。修正して正しい記録としていきます。



【参加者・自己紹介+私が今、考えていること】

●I.Y.（女性）

世田谷区から来たI.Y.と申します。一番最初に今九段下の昭和館というところで半藤一利展を見てきました。オーラルヒストリーというビデオが40分位に縮めてそれを9月3日まで観られます。

すごく取材がきちんとしてびっくりしました。

この間この会に伺った時に私は「裁判所に熟中してる」って言いましたけど、今度9月1日には、abemaTVの白石さんという方が、そのテレビで放送したことについて社会学者から名誉毀損だって訴えられていて、それが裁判になります。今度3回目の口頭弁論が9月1日の10時5分から415法廷で開かれます。

それから9月5日には、「外環道」の裁判があります。それは9月5日の15時からです。これは多分くじ引きになるかもしれない。傍聴券が必要になりますから、15時よりは30分ぐらい前にいらした方がいいです。1035法廷です。その後、報告集会が衆議院の第2議員会館であります。

まあそんなことで毎日暮らしていますが、本当にひどい世の中ですね。あのブーチンという人を誰も抑えられないような世の中で、日本の政治家の中でも、抑えられる人と抑えられない人いっぱいいますけど、世界的にやっぱりちょっと人間、おかしくなっているかなあって。むのさん、ご存命だったらどんなにびっくり仰天なさるかと思って、そんなことを考えています。ありがとうございました。（8：50～）

●S.A.（男性）

前回も、前々回も同じようなこと言っているかもしれませんが、今一番個人的に関心を持っているのは有機フッ素化合物（通称PFAS-ピーファス-）による地下水汚染の問題でして、地下水が発がん性があったりとか、いろんな内臓機能に障害を与えると、有機化合物のPFOSとかPFOAで汚染されていて、それをまあ多摩を中心とした東京都民が知らないうちに飲まされたということなんです。

発生源はいくつかあるんでしょうけれども、そのうちもっとも大きなもので有力なものが米軍の横田基地だと、その中で一刻も早く真相・原因を究明して対策を取らなければいけないにもかかわらず、国の有識者会議みたいなものができましたけれども、これもなんか当たり障りのない中間取りまとめみたいなものをまとめただけです。いつまでたっても済まないこの問題を何とかしなきゃいけないってのが今一番関心を持ってることです。

武器輸出問題についてもこれは非常に大きな問題なんです。なんとかしなきゃいけないと思うんですが、あまりにもやっぱり動きが早すぎて、その一方で自分の取り組みが遅すぎる関係で、きっちりとした考えをまとめるまで至らないうちに物事がどんどん進んでいっちゃう、悪い方に進んでっちゃうという状況でくやしき思っています。

（11：45～）

●D.M.（男性）

私はむのの息子のD.M.なんですけれども、父・むのたけじは基本的には新聞とかの力を信じていた人です。

要するに戦争を止められるかもしれない。戦争を止めるには報道機関がきちんと報道して、国民のため、あるいは人民のためになるように報道すれば戦争はとめられる、太平洋戦争だって止められたんだろ、という思いを持っていた人だと思います。それを信じていた人だと思います。

そのことは間違いのないんですけど、現状を考えた時、要するに新聞とかそういうようなものを変えていかなきゃいけないと思っていました。

現在、朝日新聞は購読数が減って、それで経営が悪くなっていわれています。経営が悪いなら、なぜか、ちゃんと考えなければならぬ。さっきの映像でもわかるように、要するに国民とか、人民のためのところに視線を移していかないと誰も支持してくれないんじゃないかって思います。そのことがとても大事なことだと思うんです。

だからそのように変えなきゃいけないんだけど、社長さんは、それじゃなくて記者を首にして経費を削減して営業利益を上げていって、そういうような姿勢のように感じられます。今日の映像を見せてあげればいいんじゃないかってさっき見ててそう思ったんですけど、要するに国民はちゃんと自分たちのためにやってくれると思えば新聞を購読して、ちゃんとお金を払ってくれるだろうというような信頼関係ができるように思います。新聞を単なる商品として考えているのではだめです。お互いに力を出し合っていくことがあることが大事だと思います。

そして、私たちが最低できることはこうやってみんなで話し合っただけの世の中どうあるべきかということを議論していくことがとても大事じゃないかなと思います。

それでちょっと今アメリカの大統領選挙で、候補者が議論したりするのテレビでやっているのを見ます。ただ昔はもうちょっとマシな議論していたように思います。トランプが、なぜいいか、なぜ悪いか、そういう風な具体的な話がないのです。アメリカも落ちたなって思います。

みなさんこうやってせっかく集まって、それぞれの思いで議論しています。こういうことをここでだけでなくもうちょっと広げたいですね、このあと花崎さんの方からお話があるかもしれないですけど、いろんな団体と結び合っただけで議論を広げてやっていきたいなっていう、そういうような思いを持っております。どうもありがとうございました。（13：40～）

資料④ 第4回むのたけじ反戦塾（2023年8月26日）の記録（2）

●T.I.（男性）

埼玉から来ました。大宮近くなんですけど石垣と申します。今日の映画もやっぱり非常に良かったですね。やっぱりむのたけじさんの明るさね。本当に学ばなきゃいけないなと思っています。

絶望は希望だって言うから。絶望はどんどん深まってきたから、希望も見えてくるんじゃないかと思えますけどね。そういう風に考えたいんですが、現実には厳しいし、さっきの映像の中にも出ていましたけど、僕は本当にあの核戦争の危機があるんじゃないかと思っています。ヒトラー、ムソリーニ、東條英機で、ヒトラーが自殺で、ムソリーニは射殺で、東條英機は法廷で絞首刑となりました。プーチンは自殺するか、絞首刑か、射殺か。どれか選ばれることになりそうなんです。全くプーチンは聞く耳持たないから、自分が自殺するんだったら核兵器も使う可能性もあるなと思えますね。今の状況では戦争の收拾はないですね。

これまでの世界の反戦運動は、アメリカもそうなんですけど、米兵が死んでいるから立ち上がったんですね。欧州も兵隊が死んでいるから立ち上がったんですよ。今度は米兵死んでないでしょ。欧州の兵隊も死なないから全然立ち上がらない。そういう状況、アメリカは頭がよくて自分の国の兵隊がやられなければ反戦運動起きないと、それでぼろ儲けでしょ。経済制裁でも儲けているし、武器輸出でも儲けている。ぼろ儲けですよ。

日本もアジア人同士で戦わせようって、台湾でもって何か起こったら、日本人と中国人が戦えばいいんだって。アメリカはまた儲けるでしょ、そういう戦略をしていますよね。だからそれにもものすごく絶望が深まっているんだけど。ま、その中でどうするかってことが問われているんです。やはり私は核というのは禁止兵器にするべきです。毒ガスと生物兵器と同様に、核兵器も禁止兵器にしなきゃいけないと思っています。核禁止条約なんてとんでもない、全然効果ないでしょ。核兵器もっているところは関係ないんだもんね。日本なんか、核の傘だから禁止条約でとっている。持っている国は犯罪だってことで、追い込まなきゃいけないなって思ってますけどね。以上です。（17：50～）

●F.K.（男性）

私は八王子に住んでF.K.といいます。ちょうど今年で90歳、1933年生まれですね。日本の敗戦の時 中学1年生でした。

あのでたらめな時代を生きてきているんですね。

それで、今みなさん中帰連を知っていますか？中国帰還者連絡会。ま、この話すると1時間近くかかっちゃうから話ではできないんですけど、ちょっと中帰連の話は抜けないので簡単にします。

中帰連は、撫順戦犯管理所に管理されて、人間性を180度自ら変えて帰国された人たちの集まりなんですけど、私も2000年の時から、その時はまだそのままだご存命であられる方も少なかったけれどおられたんで一緒に証言活動のお手伝いとか、司会みたいなこともやってきたんですけど、今もう皆さん 残念だけど こういうところで話してくれる人が亡くなってしまいました。

ま、今申し上げたとおり、この話すっかり話すと1時間以上かかるのでこの話はここで話しません。

今の日本の状態を私の目から見ますとね、やはり戦後日本がずっと革新って言うか革新政党が…、ずっと自公政権の中で、でとくに私はやっぱり腹が立つというか、ひどいのはやっぱり安倍晋三になってからだと思ってるんですね。それが一つ。

それからその後、政権が変わっているけど、やり方は全く変わっていない。とくにひどいのは、安倍晋三の葬儀とか、あるいは今度の恐ろしい軍拡の話が進んでいますよね。こう言うのを最近閣議決定だけでやっていく、国会にかけない。だからそういう意味ではね、ほんとに危機感を感じています。それから長くなるので、詳しくいろいろ話ができませんけど、核兵器はまず 使えないと思いますよ。使われたら敵も味方もないんですよ。ご存じの通り。何年前ですかね、アメリカの防衛担当者が、同盟国が核兵器で攻撃されてもアメリカは対抗しませんよってはっきり言っているの。なぜか、それをやったらニューヨークもワシントンも灰になっちゃうの。要するにあの核兵器ミサイルでしょ。お互いに使っちゃったら、敵も味方もないですよ。そんな中で、今の政権の沖縄にあんな基地設けるとか、沖縄の人たちが深刻に考えているのって、ちょっと長くなりますので今日のところはこんなところで失礼させていただきます。（21：10～）

●M.T.（男性）

埼玉県上尾市から来ましたM.Tと申します。今週の月曜日に『シンちむどんどん』と言う映画を見にいきました。今ポレポレ東中野でやって、大変面白かった。

昨年の沖縄県知事選挙を取材したドキュメンタリーなんですけど、前半は沖縄の明るい選挙をですね、お祭り騒ぎのようなものをうまく取材してまして、後半は辺野古基地建設地のゲート前の座り込みを取材して、それから普天間基地のそばに国際沖縄大学がありまして、そこに前泊先生が研究室をもっていて、普天間基地が見えるんですね。後半は非常に現在の沖縄が抱えている問題点をしっかり出して、作った映画監督はですね、ダースレーダーさんとブチ鹿島さんという YouTuber ですね。40歳前後のお二人なんですけども非常にうまく沖縄を描いたなと思って感心しました。まだ上映されてると思いますので是非、お勧めします。

今、私が考えているのですね、私、個人的にいろいろ動いているんで、集会やデモに参加するんですけど、今、軍拡反対とか、軍事費拡大するな、集会、デモでやるんですけど、自衛隊に対して直接、市民がですね、監視活動をするとか、反自衛隊を掲げて運動する方がいいんじゃないかって思うんです。

今ちょうど自衛隊隊員募集、各県の防衛局(?)や地方協力本部が今年は15000人の隊員を集めるって募集しているんですね。1回目が3月から5月かな、7月～9月、次が11月から1月位まで3回に分けて各自治体に協力せよと、自治体の方では広報に隊員募集の広告を入れたいとかですね、ポスターを貼ったりとか、それからひどいところでは10月から22歳の卒業する年代の方たちを 住民票から抽出してそのデータを地方協力本部に提供すると言うとんでもない自治体もあるわけです。で、こういったことを止めさせると、地方自治体が何もこれをやる必要がないんで、急務ではないんで、止めてくれと市民から要望するとか。

それから私は東大宮って言う駅を使っているんですけど、ここは西口に芝浦国際大学がありまして、東口に市立高校があるんですね。かなり学生たちが通学に使っている駅なので、夏休みが終わって9月からですね、駅頭に立って、「あなたたち、自衛隊って言うのはね」とか「自衛隊に入るの?」と若い人たちと対話してみたいなと考えているんです。

やはり抽象的なスローガンよりもですね、自衛隊はダメだと言うことを声に出していかないと、どうも中央に集まって軍拡反対、戦争反対を叫ぶのいいんですけど、やはり、地域で、若い人たちと対応していくような、これから必要なんじゃないかなと思うんです。

若い人たちが無関心というのはそうなんですけど、韓国の文化を非常に理解している若い人たちがですね、それから中国がアニメーションのすごいが作られていて、若い人たちが、中国のアニメーションに非常に関心をもっているとかですね、中国、韓国を日本の右派はボロクソにいいんですけど、若い人たちは案外、文化的にですね、中国・韓国に親近感を持っているという部分もあるので、これを「自衛隊に入るな」と言うことも含めて若い人たちと対話をしていきたいなと考えています。（25：15～）

●F.K.（男性）

すみません、一言話すことで抜けちゃったんですけど、さっき話した中帰連の資料館が埼玉にあります。

そこに、むの先生がお越しになったんですけどね、そんなこともありまして。むのさんが訪ねてきていただいた時は100歳でした。直接お話を聞くことが出来て、そんなことがありました。（30：15～）

資料④ 第4回むのたけじ反戦塾（2023年8月26日）の記録（3）

●K.K.（女性）

こんにちは初めて来ました。いつもそのウクライナとか、いろいろと報道を聞くじゃないですか、で、戦争って無くなってないじゃないですか。戦争の終わり方、しまい方って色々あるんだと思うんですけど、それから今日本の麻生さんがやる気満々ですよ。戦争を防ぐやり方ってというのはどんなものがあるのかっていうのを日頃ずっと思っているんですよ。

定年になりまして、年金生活になりまして、やっと自分の時間っていうのが取れるようになったら、今度は耳が聞こえなくなってきました。だから講演会とか映画会とかいっぱい行くんですけど、聞こえない部分がすごくあるんですね。今もお話聞いて私はどれくらい言葉が、音じゃないんですね、音が入ってくるんですけど聞き取りができないんです。で、今補聴器を練習中なんですけど。どうもこういう話をしててもどこまで自分が理解しているのかっていうのはいつも不安です。足も具合は悪くなってきたし集中力も減って、本を読む、新聞読む速度も減っちゃって、あ〜こう言う状態で私は一体何をするとかと思っています。

でも今日来て、半分でもわかれば少しいいのかなって。映画はよく来ます。空いてればいつも、いい映画なので来ているんですね。一昨日は田原総一郎のテレビでやらないやつが、なんかこう放送法対談のDVDを聞きに行ったんです。

私は今どの位、理解しているんだろうか、自分がどれくらい力があるのか、何をすればいいのか、いつも不安でいっぱいなんです。署名やってください、署名集めてください。署名もやります。友達に会えばもうなんですけど。

この間、沖縄の辺野古の裁判もすぐ却下で受け取りもしないでしょ。あれはムダだったんかなって、いつもがっかりしているですよ。だからきょうここに来たら、何かヒントがもらえるのかなって、思って来ます。

それからちょっと思ったのは、今週かなんかのクローズアップ現代で、核兵器を使用した場合のシミュレーションがありますよね。ご覧になりました？どこに持ってくるかとか、私はそれを見てますよね、具体的にあってるし、プーチンもやる気満々の感じの言葉だし、あ〜どうなるのかという不安な状態でいま来ました。八王子から来ましたK.K.です。（30：55〜）

●M.K.（女性）

初めて参加させていただきました。むのたけじさんのことは、お名前だけはよく存じ上げているんですが、実際に本を読んだり、講演を聞いたりしたことはなかったもんですから一度ぜひお話を伺いたいなと思ひまして参加させていただいたんですが、今日は映像で、表情も良く、大きく出ていましたので良いお話を伺ってほんとに期待通りのお方だなんて思いました。

勉強不足で私の方が、本やなんかをあまり読んでないので、自分の不勉強を感じました。今日は良いお話を聞かせていただいてほんとにありがとうございました。

台東区から参加させていただいたM.K.と言います。

私が生まれた地方は河原崎という名前がけっこうあるんですよ。役者さんの河原崎とは全く関係が無いんです。浜岡原発の近くなんですけど、そこには河原崎という名前が何軒もあるんです。舅が河原崎という姓でした。（34：45〜）

●H.N.（男性）

調布から来ましたH.N.と言います。この勉強会4回出ています。毎回同じこと言ってるんですけど、あちこち講演会とか、映画見に行っています。きっかけは日本の加害の映画ですが、こう言うテーマの映画を見た時にどきとしたんです。それまでは、漠然と戦争はこんな風だというイメージしかなかったのが、加害の歴史を映画を見てどきとしたんです。それから、それが多分テーマになったんですけど、731部隊とかですね、いろいろあちこち時間がある時に行ってます。この会で、自分の今テーマにしているのはですね、自分が感じた切り口のドキュメント映画を、何とかして若い人に伝えるようにしたいなって思っています。ア

今の時期 ちょうどNHKの戦争ドキュメンタリーやってますから、全部見れるのは見てるんですけど、そしたらたまたま1個発見したんです。NHKの「戦争アーカイブ」というのがありました。ものすごい財産ですね。戦争証言集ですね。広島長崎の証言集とかですね、ドキュメントとか、それを年表的に開戦前1年とかですね、開戦当日とかそういう記録がものすごいんですよ。いっぱいあってとても見切れないんですけど、こんなのがあったんだ、と。実は昨日ですね、NHKの渋谷、代々木ですか、行ったんですけど、そこはコロナで閉鎖中でした。NHKの愛宕の博物館に行って、あそこは昔からあってドキュメント中心ですね。それは戦争アーカイブじゃなくて、指定するとその古いドキュメントが見れるというものです。そういう大きい検索はなかったんですけど。

埼玉にもあります。証言記録が残っているのはそこにある、全部は見きれないんですけど、自分のもったテーマ、切り口で検索できます。もう一個は扱っていない「加害の歴史」です。それをくっつけてその同時期に日本はどうだったのか、あるいはこの戦争では日本人はこういうことをやっているという話を付けて自分のテーマにする。

これは朝日の記事なんですけど、公共施設でやる戦争展で加害の歴史、これ長崎の平和記念館ですかね。広島『はだしのゲン』を…。加害と言うことを公には出さないのですが、NHKに聞きに行ったらだめだから、NHKのこのインデックスをこれにくっつけて、同じ時期に日本がやっていることをひもつけてドキュメント映画をくっつけようかなと思ってます。

まず自分で学んで、自分のテーマを決めて、若い人にこれを紹介するんですね。この時は日本はこうなっていると。加害の歴史を付けて若い人、中高生が勉強できるようにしたいなと思っています。ま、自分で頭を整理したら、NHKに提案しようと思ってますけど、1個良い発見がありました。加害の歴史の話をすると、切りが無いからしないんですけど、731部隊と併せて、これも、たまたま知ったわけなんですけど、731部隊の残した毒ガス兵器が残ってて、日本、中国、残存兵器の加害、毒ガス兵器は残ってて、中国と日本の一部で、事故を起こしたのがあった。ますますその加害の歴史を押さえていきたいなと思っています。

もう1個、勉強中が関東大震災100年ですよ、これもあちこち行って勉強してます。今言ったNHKの歴史のテーマはですね、1930年から、満州事変の前夜位から、で、23年の大震災、韓国人の虐殺、その前の1910年でしたっけ、韓国併合、この戦争の週周(?)っていうのは、韓国併合から日本の植民地化の歴史をちゃんと知らない、多分ほんとうの戦争の意味がわかんないかなと思いますけど、今勉強中ですけど、テーマはそういう風な流れであると思って来ました。失礼しました。（37：35〜）

●M.I.（女性）

東村山から来ましたM.I.と言います。私は初めてです。私は今年に入ってから、私が所属していたあるグループが、分裂しちゃいまして、グループというかサークルですかね。分裂しちゃいまして、今どこにも行っていません。その前は311の後に行った地域にできた「さよなら原発」それに入っていたんですけど、それはバラバラになって無くなってしまいました。私が行くところ行くところ、どうしてこういう風に無くなっちゃうんだろう、と思ってしまっんですけど、誰々さんが悪いんだとか、仕方が無いことんだとかで片付けてしまってきている面が大きいんですけど、でも、しつこくひっかかっていまして、とくに分裂したことに関しては、引かかったまま、そのまんま、まわりの人たちも何もやらないし、私も考えなくていいかと思っていたのですが、きょう映画を見ていて、やっぱりそれなりに私、何でそうなったのかとすることを考えていかないといけないなって思いました。

やっぱりあの、こんな難しいことって、難しい言葉でたくさん聞くんですけども、自分が住んでいる中で、自分が暮らしている中で感じることを大事にしていきたいと思いました。今、私は何もとくにやっていません。やっていないというか、やっていたことが途切れてしまっています。個人的にやっていたことが、途切れてしまったのは、こう言う社会状況の中で、途切れてしまったんじゃないかって、思うこともあるし、何が原因なのかって言うのをまだ考えていませんけれども。（次ページにつづく）

資料④ 第4回むのたけじ反戦塾（2023年8月26日）の記録（4）

私自身の内面的なものを私は考えていきたいと思っています。今日の映画の中で、見た中で、むのたけじさんがおっしゃって「自分を大事にできない人は周りの人を大事にできない」とおっしゃってたと思うんですが、それってなんか私に当てはまるじゃん、と言うふうに思いました。

私は介護の仕事をずっと長いことしてきて、定年退職で退職したんですけど、介護の仕事って、人を大事にする仕事なんですけど、今、自分のことを大事に出来なくて、こう言う仕事やれるのになって、自分でも思ったことがあるので、きょうの会に来ました。そういうことも含めてですね、今、私が何もやれてない状況をもう少し考えたいと思います。（43：22～）

● K.O.（男性）

小野と申します。ここ3年間位ほとんど何もやっていないので、自分のするようなことやってないんですけど、今年、8月前後のマスコミ報道を見ていると、被害者意識で見えますね、広島長崎をはじめとして。あらゆる面で、……やはり加害視点がないとどうしようも無いと僕個人的には、やはり加害というところで調べてきたんで、来年に向けて調べたところをパネルにして、全国に貸し出すかなと思っています。

ま、具体的には何をテーマに知っているのかっていうと、俺、もともと福島県に住んでたんですけど、原発で追い出されてこっちに来てるんですけど、福島県に65連隊てのがありましてこれが2万人位、南京で虐殺してるんですけどその資料を集めたんで、それをパネルにして、できるかどうか分かりませんが、来年12月位までに貸し出すかなと思っています。以上です。（48：17～）

● F.O.（女性）

ほとんど聞こえないもんですから今何を話してるんですか？「自己紹介ですか？」で聞いても答えてくれなくて。だからいとおう私が話したいこと、自己紹介兼ねて、最近私がやってる反戦活動ね、それをしゃべらせていただきます。

まず、18日、19日と川越で全国紙芝居祭りという大会があったんです。これ全国ね、全国。500名の方が来ました。そのうち、「トコトン紙芝居」という夜、集中的に紙芝居だけを2時間やるんですけど、その演者いわゆる語り手ですね。しゃべる人。しゃべる人は110名以上いたんです。つまり五分の一、20%は皆さん演者をやりたい、と言うことは、そこを私確認したくて、行ったんですけれど、私も演者をしました。

その中でやったのは、早乙女勝元さんの東京大空襲、3月10日の約束って言うのは、私がやるならこれだと思ってやりました。全国に紹介があるので、全国に広まったと思います。それがやっぱり今大事じゃ無いかかって思ってます。で、やりました。

それであの国会も10月の9日にやっぱりやるんだけど、やりっぱなしって言うのが多いんですけど、やった後こういう風にあのやっぱり話し合ったり、するのがすごい大事です。

いろいろ身につけてその人たちがさらに今度またやるといわゆる戦争をやらせないっていうことが一人一人から始まると思うんですね。だから大勢、大きな団体がイベントでいっぱいやってますよ。私も行って、どういうことを言っているのか、みんなに伝えたいと思ってるんだけど、やっぱり一番大事なのは、ひとりひとりだと思えます。ひとりひとりが「うわーっ」と力を、いざと言う時に出す、それまでにいろんな蓄積をして、1人が10人とか、今日も拡大会議にいったら50人から100人は来るだろうと思って来たら、拡小会議だったんですね。前の時は30人位いたんですけど、今日20人、拡小会議、それもいいと思いますけど。そういうことでいろいろ話し合っていくってことがいいと思います。

31日に、せつかくの拡大会議ですから、ちょうどこの部屋です。ね、関東大震災のパネル展やります。なかなか良い資料が出るってことで、それが10時半なんです。午後から文京シビックセンター大ホール、1800人入るんですけど、そこで朝鮮人の虐殺、中国人の虐殺の追悼大会をやります。それで、中国、韓国、それから日本とあのいろんな犠牲者の人が集まるんですけど、あのそれだからすごいんですね。それでそのためにやっぱりお金が必要なのね、あそこの大ホールは100万ぐらいかかるようになってます。

私実行委員になってますから1年半位前から毎月出てるんですけど、それでいまみんなお金集めているから、皆さん協力してください。「出れないけど協力したいわ」（と言う人も）1000円の手ケットがあります。その手ケットが無いとは入れない、実行委員もみんなお金を払うんです。と言うことで、私は具体的に、1人から始められることをしっかりやっていくそういつたいざとなったらやっぱり82歳ですからもうデモで倒されて亡くなってもいいやっでぐらいいいざとなったら頑張ります。はい。ということでそんな感じですね、それで来ました今日は。

若い人に伝える、3月10日の（東京大空襲の）早乙女さんは、小学校上がる前の人にも伝えて欲しいっていうのを書いてあったので、若い人に早乙女さんが最期に伝えたいなっていったことで紙芝居にしてくださいました。だからこれはやっぱりやらなきゃいけないなって、ごめんなさい雑ばくで。ほとんど聞こえないのでこつこののを後で読まないといけない。お医者さんに行かなきゃいけないんですけどそういう状態だしすいませんね、ごめんなさい。（50：23～）

● M.K.（女性）

…しみじみと感じることがいろいろあります。…、いまみんな戦争反対とか、そういう会もできるけど、戦争反対なんて言ったら連れて行かれる、捕まっちゃう、治安維持法なんかで。何にも言えなくなって、こういう会なんか、ちょっと何人かで集まると捕まってるなんか言う時代があったわけだから、今は不思議な位そういうことは普通に出来るけど、それが何にも言えない時代が来たら恐ろしいなと思いますし。

「9月東京の路上で」という本があって、人のちょっとしたことで、そういう酷いことやったりとか、日本人としてははずかしいことをやったのを反省しなきゃいけないし、…ちょっとしたことで（デマに）動かされて虐殺したりなんかして、ほんとに恥ずかしいことをしたと、人間の心ってほんと恐ろしいものだと思うんですけどね。どんなにやさしい人でも…（？）考えてひとりひとりがきちんと考えをもって行かなきゃいけないなと思っています。

（57：25～）

● K.S.（男性）日野市から来ましたK.S.です。

13年前に定年退職したんですけど、それまで岩波書店で本作りに関わっていてその中でむのたけじさんにはいろいろとお世話になりました。私自身も耳が遠くてですね、さっきから音は聞こえるんですけど、言葉が理解できないと言うことが非常に多くて、今日もせつかくの会ですけど半分位しか、聞こえてないんじゃないかなと思うんです。そういう意味でいつもこれ記録を文字起こしさせてですね、いただけるのが本当に助かってまして、すごい大変な作業だと思ってるんですけど、おかげで、ああこう言う話題が出てたかなって、遅ればせながら気がついたりですね、そんなことでありがたく思ってます。

戦争との関連で今私がちょっと関わっていることで言いますと、戦争を、戦後生まれが85%を超えてるって言うことのようにですけど、戦争の体験をどうやって継承していかってというのがいろんなレベルでね、いろんな所で話題になりますよね。で、そのことと関係するんですけど、まあ、よく人のつながりで地縁、血縁っていう言い方がまあ昔からありますけど、もう今あんまり地縁、血縁の時代じゃないんじゃないかっていうこともあってですね、私は思うのは学園っていうのがですね、学校つながり、これまた小中学校高校そして大学と含めていいんですけど、学校時代の人間関係のつながりというのが、案外、定年退職した後、いろいろ感じるんですけども、結構大事っていうかですね。意味を持ちうるって言うことがあるんじゃないか、何でそんなことを言うかという、私はたまたま、むのさんと同じ東京外大の卒業なんですけども、外大がちょうど今年創立150周年だっていう節目の年なんだと思うんですけどね、

それとは別に今年はいわゆる学徒出陣の80周年だっていう節目の年なんです、1943年10月21日に神宮外苑のセレモニーもありましたけれども、そういうこともあって自分たちの大学の、戦争との関わりを調べようじゃないかっていう動きが少しずつあちこちでちらほらと起きてるらしいんですよ。（次ページへつづく）

資料④ 第4回むのたけじ反戦塾（2023年8月26日）の記録（5）

長くやっているのは実は、一橋大学が毎年80年でなんて節目に関係なくやってきているわけですけども、それから東京芸術大学もあれですね戦没学生の作曲した曲の演奏会とか、いろいろここ数年やってられます。

その東京外大でも今年初めてですね、戦争と外大生っていうプロジェクトが春頃から動き出して、学生たちをあるゼミの先生が呼びかけて動き出して十数人の人たちも動いて、それにOB達も有志が少しこう関わって協力するっていう体制が動いている。そこに私自身は大したことやれてないんですけどどちらと関係しているということで、秋にどこの大学でも大学祭ってというのやりませうけど、外語祭っていうのもあるんですけどそこでひとつ展示をしよう、戦争と外大生。実際まあ外語大って、ちょっと特殊な、いろんな語学をやっている関係で、とりわけロシア語とか中国語とかですね、そういうのを学ぶ学生がいれば戦争との関係ではずいぶんいろんな役割をしているわけですよ。そういう面も含めてできる限り調べようと、全貌を洗い出すっていうのは難しい話でとりあえず三人の人に絞ってその後、学生時代どうだったか、戦中どうだったか、そしてその後どうなったか遺族はどうだ、遺志は？そういう辺りをですね、調べ。

そのひとりにはラバウルで刑死した片山日出夫氏、もう一人は芥川龍之介の息子、芥川多加志っていうのがたまたまいたんで、その人どうなったんだとかですね。

もう一人、これは去年の秋に映画が話題になった『ラーゲリから愛をこめて』というシベリア抑留の劇映画がありましたけれども、あれの主人公、山本幡男と言う人がシベリアで亡くなっているんですが、その人が外大のロシア語科卒業だったんです。その人が非常に魅力的な人なんです、実際に映画の中でもそう描かれていますけど、非常に美化するっていうのはあるんですけど、とにかく実際の人物、人間像がすばらしかったっていうことなんで、その人のことを明らかにしようということを中心にしながら、しかもその映画も上映しちゃおうとなりました。しちゃおうたってもちろん許可を得てやるってことで、150周年ということで大学はお金を全部出してくれるんですけども、そういう映画上映も含めて1週間ぐらいその展示をしよう。そういうことをやっていて私も横でちらちら覗くだけですけど、なかなか面白い試みだなという風に思っているわけです。

ですから、そういう意味では戦争体験っていうのが、なんか今はウクライナが、ああいうことがあるんで、テレビで生々しい映像見ている人からすると若い人でも何て言うかな身近に感じるって事あると思いますけど、やっぱり戦争ってなんか遠いこと人ごとという感じはねあるのかもしれない。そういう意味では人ごととして、こういうところちょっとずらしてですね、我がことにつながるっていうことを、例えば外大来た学生つまり卒業生なりからすると一本の糸の繋がりができるっていう感じがあるわけですね。だからそういう意味でどこの大学でもそういう可能性とかあるのかなと思ったりしてちょっと変わった試みとして今年ならではという80周年ということですね、生徒出陣を見直すということとしてちょっとご紹介したいなと思いました。(1:00:07~)

●S.H. (男性)

先ほど話がありました早乙女勝元さんの江東区から来ましたS.H.と申します。よろしくどうぞお願いします。映像の力というも思っているんですけども、今日はむのたけじ。この間僕がここで見ましたのは、桐生悠々って方のドキュメンタリーでございました。桐生悠々のお墓が実は多磨霊園にあるんですよ。僕は行ったら、たまたまぶつかりましてね、ああこれが桐生悠々だって感激したことがあるんですけど、

もうひとつ感激したことはですね、実はこの8月に広島に行っちゃいました。派遣団ということで行って来たんですけども、その中の1人がですね、「S.H.さんこれ見てる」と言ってくれてYouTube見せてくれたんです。これは何かというと、『ひろしま』、この『ひろしま』っていう映画、もう、実は、この会場で、憲法を考える会の花崎さん、本当に素晴らしいチョイスをいただいているんですけども、これ見まして、その時は白黒だったんですよ。その「ちょっと見て下さい」って言われたYouTubeは、何と何とカラーなんです。これはですね、今はやりのAIなんですけど、そんな感じでやっておるって言うことで。

すいません、あとふたつだけ。それで派遣団に行って、ようやくコロナ下で、学校の修学旅行の子どもたち、いっぱい来るようになりました。ほんとに僕らの会合は4年ぶりだったそうなんですけど、コロナって言うのは人を分断させますね、ようやくと今回出来るようになりましてってことで、催したんですけど、その派遣団の広島 YouTubeを見せてくれた方のお子さんが中学校の3年生だったんですね。その方が僕に言ったことは、五感全部使えと、耳で聞いて、頭で覚えて、それで人に会ったら、この経験を是非話してください、口を使いなさい、と。それからもうひとつ、手を使いなさい。今日あなたが思ったこと、感じたこと、文章にきなさい、と。それはあなたのこれから将来、何年たつかわかりませんが、きっとあなたの宝物になるから、と。というようなことを言って来たんですけど。すみません。

それからもうひとつ、これは品川区になるのか、港区になるのか、わかりませんが三田台公園と言うのがあります。戦争って言うのは何かって言うと、僕考えるんですけど、是非ご意見があったらお聞かせいただければ有り難いんですけど、戦争って言うのは国と国の問題なんですよ。ところが、三田台公園に行ったら感じたことは、縄文遺跡があるんです。縄文遺跡があってその縄文時代の年代はどの位続いたか、もう1万年、1万3000年位の長い時期を人間、われわれ人間の祖先は生きていたんです。その後、その三田台公園の説明板にあるんですよ、その後古墳時代がやって来ました。エジプトで言うとピラミッドができて、日本で言うと古墳ができて、ここから分断、つまり富裕なもの、権力を持っているものともたないものの差が出来たと言うことがあってですね、現在もその間にいた、古墳時代から現在までの時間って言うと、どの位あるかって言うのは2500年、3000年位、われわれ人間の歴史って言うのは、その前に1万年戦争のない時代があって、みんなが協力しないと生きていけなかったって言う時代があるってことをみなさん思いましょ、ということの説明板に書いてあるんですけど、こういうことをわれわれ、それから先程言った仲間、子どもたちに回って、教えて、見せて運動していけば(?) どうにでもなるんじゃないかって、いつも友達に言っている。

この憲法を考える映画の会って言うのは、見ただけでなく、見た後、こう言うディスカッションがあって意見交換が出来るから、すばらしいからおいでって言ってきてるんですけど、ぜひこんなことを先程どなたかもおっしゃったように身近なところ、自分のまわりから広めていければ、ほんとうに戦争のない、縄文時代のような、人と人が協力しなければ生きていけないような時代が来るんでは無いかと、話を終わります。(1:07:35~)

●K.S. (男性)

目黒のK.S.です。(先程、朝ドラの願いと言うことでピラ配ったんですけど、実際にですねこれ署名活動は新居浜市長がNHKの会長に持って行くと言うことで、今、署名集めていますのでぜひこれ署名をお願いします。もう1件の署名があるんですけど、これはですね、原発のことをよく言われていますけど、これ最高裁とか地裁に出すんで、もう私は25人集めたんですけど、あと7か6人だけなんですけど、できたらこれも都道府県から書いて欲しいんで回しますんでできる人はぜひお願いします。)

私は旅行が好きですね、この間、フィンランドのヘルシンキに行って、それからアイスランドのレイキャビックとロンドン、オクスフォードに行ってきたんですけど、ウクライナがどうなっているか、確かヘルシンキでフィンランド自体がまあNATOに加盟した言うことですね、どうなっているのかな言うことでヘルシンキでちょっと見たんですけど、あんまり直接戦争言うのは感じなかったんです。NATOの事務所を見たかったんですけど、結局日本の大使館に連れて行かれてですね、大使館に聞いたらフィンランドはまあ確かにNATOに入ったがまだ事務所はできてない。日本人が2000人ほどフィンランドにいて、もしロシアがと、まああの関係で言うことでなんか大使館としては2000人の避難を考えてますって、言っていました。

それでまあアイスランドは地球の歩みで大西洋プレートとユーラシアプレートのなんか難しそう割れ目なのでどんなのか見たかったのですが、ほんとに崖見るようなことで、大したことなかったんです。

資料④ 第4回むのたけじ反戦塾（2023年8月26日）の記録（6）

ロンドンですごいなと思ったのはですね、QUOカードで地下鉄のバスもピツとして乗れるんです。日本はまだSuicaとか乗れるんですけど、結局利権の関係ですね、Suicaをあのスーパーとかコンビニでみんなこれカードでできるんだからあの地下鉄もJRもできるはずなんですけど利権だと思えます。今、「はんこ」もなくすということで、何か山梨のはんこ業者が無くさないでくれて未だにですね、あのそんなこと言ってるようじゃやっぱりもうどんどん文明が進んでいるんだったらまあいいところでもすね日本は取り入れてですね、あのやっていったらいいんじゃないかと思えますけど、まあ長くなるのでその位にします。

（1：12：32～）

●K.O.（男性）

西東京市のK.O.と申します。医療系の出版社勤めてまして、むのさんが亡くなる4～5ヶ月前に取材、多分最後の取材だったと思いますけど、お世話になりました、そのときにあの、うちの雑誌は業界誌と言いますか、小さい雑誌ですので、医療の被保険について語ってほしいなと思ってたんですけども、最初にあの「国民皆保険制度のある日本というのは、結構アメリカでもいんじゃないですか」って言ったら、「何言ってるんだ。50年ぐらいでガタピシ言っているような制度が、立て直そうというのが、あなたの役目じゃないか」って。

その時とてもお元気で、そこからとても優しくお話いただいて最後に医療ってことを考えると人類が生まれてきた時から怪我なんかした時にどうやって直すって考えたのが医療だから人類始まった時から医療ってあるんだよって、それをよく医療者の人たちにも伝えてほしいというのを言われてるんですけど。もう7～8年になりますけども、そういう気持ちでいながら仕事できているのはありがたいなっておもいます。今日もこの会に参加させてもらいました。

戦争のことはちょっとあんまり私も非常に関心がちょっと薄かったなと反省ひとしきりです。今日はずっと思ってたんですけども、戦争自体も争いとかそういうものは人類始まった時からあったんじゃないかと思ったけど、いま戦争起こっちゃうと、核戦争なんか起こっちゃうと、人類滅ぶ時に来ている、そういう話し合いを私ならば医療者の人ともできるような、こういうような機会を刺激を受けて、そういう話ができるような仕事ができればいいなと私、医療者（？）ですけど、そういう気持ちにさせていただいたというのも、きょう武野大策さんにお誘いいただいたので参加させてもらいましたけども良い会だったなと思っています。こういう気持ちを持ちながら、これからも仕事していきたいなと思います。今日はどうもありがとうございました。

（1：16：04～）

●M.K.（男性）

浦和から来ましたM.K.と申します。前回もいちおう出て、出席したんですけど、用事があって、途中で抜けました。朝日新聞をうちでとってるんですけど、朝刊だけでも今4600円ですか、夕刊とると4900円ですか。これから大変だなと思います。朝日は結構読みごたえがありますから、切り抜きなどもやるんですけど、切り抜きした後の後始末がきちんと出来てないといえますか。後あの週刊金曜日の読書会、浦和に読者会があって、読者会に毎月参加しています。浦和はどういうわけか、読者会が二つありまして、カフェ土瑠茶と言う町の喫茶店でもって毎回3～4人ですね、少人数ですけど続けています。今編集長やっている文聖姫さんとかをお迎えて、ライブなんかもやったりしています。それでつい最近編集委員の中島さんが辞められた。辞められた理由って言うのが、編集部の仕事で、何か問題があったと言うことですが、あまりはつきりしないです。

佐高さんが辞められたのは非常に原因がはっきりしててなんですけど、中島さんにはすごい期待していたからちょっと残念な気はしています。そんなところで。

（1：18：55～）

●Y.S.（女性）

今日はむのさんの映像を最後まで見れなくて残念でしたが、でも、すごい元気ですよ。あれ2011年、もう100歳近い（武野：96歳ですかね）すごい元気なのに、96歳であの気概、車椅子も乗らないみたいになっちゃって、（乗ってますよ、最後）あれ見るともって私たち頑張りなきゃ、やんなきゃいけないですよ。私だって60、まだ60代ですから、いやほんとにやんなきゃなあと思って。じゃあ何をやるかって、今一番大事なことは戦争しない、起こさない、巻き込まれない、巻き込まさせない、すでにウクライナで起きてますけども、これは出来るだけ早く止める、やはり多くの人が、戦争は最大の破壊ですよ、生命の破壊、憲法の破壊、心身の健康の破壊、自然破壊、貴重な絶えものも住む家も、文化遺産も歴史的な建造物もオペラ座も本当に本当にものすごい破壊。いったいつあれがウクライナで何年後に回復するだろう、再生するだろうって。広島はもう原爆で破壊されてかなりかかりましたけれども、ウクライナとあれでまた、どんどんアメリカやイギリス、外国が武器を支援している、日本も協力するようなどころ、今度日本が武器も輸出できるように法律変えましたよね。軍事産業 アメリカからトマホークやミサイルや、オスプレイ他いろいろを買うだけではなく、それじゃ足りない日本の企業に今度は作らせる。今までは武器禁輸三原則、でもそれも変えられ、また今度大幅に変えられ、輸出もできるようにすると。だいたいなんのため？そもそも日本は戦争を放棄して、世界に平和のために貢献する役割だったんじゃない、で武器を作ると、武器を持つと、じゃあそれに対抗するようにまた相手も想定する兵器を作りますよね。軍拡競争になっていて、それに浴する資源やお金、エネルギー、人、労働者、どれだけのムダを作るんだろう、そしてまた破壊するのは、一番大事なことはやはり戦争を起こさない、止める、それにはどうすればいいか？

今台湾有事と言われてます。それに備えて43億円ですね、43兆円か、桁が違う、5年間で倍増、そんなこと私たちはいいですよって言いました？OKって言いました？国会で議論されました。閣議で決定されて、その前にアメリカに約束したわけですよ。そういうことがどんどん行われてる。そんな自民が民主主義で選挙を行われて国会の第一党、与党ですけれども、公明も協力して。でも私たち軍事倍増OKなんて私たちが言われていない、問われてもない。戦争やるときも戦争やりましょう、やりますか？って国会でおそらく議論されないで、私はどうやって止めるか、まずは、まずは、…。今日は遅れた後は高橋哲也先生 哲学の9条とかとかいろいろ言ってるしやる、沖縄の問題とかいろいろ言ってるしやる高橋哲也先生の講義のオンラインでの講義を聞いて遅れたんですけども、ちょっと驚いたの、ショック、ああそうだなと思ったのは、誰も「外交が大事」って言いますよね、外交一生懸命やって戦争起こさないように。でも日本は外交きちんとやってるんでしょうか。先生は外交サボるな、日本政府外交サボるな、きちんとやられて。

そして1972年の日中共同声明、これを改めて日本と中国で確認すべきと。ああそうか、とそうかと、日中共同声明 田中首相の時です。それで国交を回復したわけですよ。これをみなさんあらためて読んでみて下さい。「そうだった」と。政府は中国、中華人民共和国、本土の方ですね。中華人民共和国政府が中国唯一の合法的な政府であることを承認する、台湾では無く、で、日中国交正常化の実現を言って、日本に対する戦争の賠償の請求を中国は放棄したわけですよ。放棄を宣言する。大事なことは、「日本および中国は主権及び領土保全の相互尊重、相互不可侵、内政に対する相互不可侵、不干渉、平等および互恵並びに平和共存と諸原則の基礎の上に両国間の恒久的な平和友好関係を確立することに合意する」というあるんですよ。つまり戦争しないと宣言したわけですよ。

（次ページにつづく）

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾(2023年7月6日)の記録 (6)

「恒久的な平和友好関係を確立する」と。なのに今、台湾有事だと言ってアメリカの戦争に加担させられようとしています。させられるっていうかな、まあ爆買してトマホークも買って、だからこれを確認して遵守すれば戦争起きないです。日本と台湾の間で。アメリカは、台湾に、半導体のTSMCがありますね。世界的なシェア、8割か9割もっている、さらに台湾では、中国本土に侵攻されると、台湾を拠点にして、東南アジア、その先。そして太平洋、アメリカに近くなります。アメリカに出て行きやすくなります。

だからその二つの点、何としても台湾に侵攻してほしくない、アメリカにとっては、でも日本にとって、日本はそのアメリカの利益をまもるために一緒に戦うんですかと。今は過去の戦争と違ってミサイル戦争です。ミサイルが南西諸島、与那国やいろいろ配備されています。中国は日本本土が習えるだけのミサイルを持っています。

もちろん核兵器も持っているし。私は横浜の出身なんですが、横浜のノースドック、ここはベトナム戦争の時に神奈川のいろいろな基地からベトナムに、出撃していったんですけれど、ノースドックはそれを支援する軍艦が出ていったところ。戦車もベトナム戦争でやられた戦車が神奈川に運ばれてきて、修理されて、それをまたベトナムに送り出すその港だったところ、それを、ベトナム戦争からだいぶたって、神奈川県に返還すると言ってたんですが、今、返還せず台湾有事に備えて、またそこから返還せず、兵站、物資支援の港に作り変えられています。そういったことは、横浜ノースドックだけじゃなくて、横須賀、他のところでも日本全国そうです。おそらくミサイルも配備されて自衛隊も地下化されている。そうやって戦争に備える。戦争に備えると、リスクも高まります。どんどんどんどんお金も使っていく。ほんとに日中共同宣言の原点、そして平和憲法の原則に帰って…、だけど憲法と言ってもほとんど形骸化していますよね。形骸化させられている。戦争放棄、基本的人権の尊重、国民主権、これ、破られているでしょう。守られている？ と思います？ だから、自民党の支持率をもっと下げなきゃいけない、政治のあり方がすごくおかしいから、私たちでできることは選挙で やり変えることだと思います。あるいはそれが無理だったら政権と支持率をどんどん変えて行く、

と同時に、さっき言った横浜のストック、戦車を運んでいましたが、ベトナム戦争の時に、それが一時期ストップしました。飛鳥田市長が村雨橋という橋を通らなくさせた。重量制限で市長の許認可が必要とした。重量をはるかにオーバーしてらんで戦車を乗せたトラックを通さないようにした。止めたんですよ、いちど。おかげでベトナムに戦車が運ばれないで済んだんですが、市長がそういうことができた。只その後国会で法律が変えられて運ばれるようになったんですが、ただ国と自治体は対等な関係です。国も、県も、市も対等な関係です。だから国に対して国がおかしければ「これはおかしい」と、「おかしい」と言っていけばいいんです。議会で、あるいは市長が、声明文とか、要請とか出して、議会を動かすのは私たち市民の声です。国会もそうですけど、自治体の議会に対してもっともの言ったらどうかと思っています。と同時にマスコミに対しても。

ものすごく汚染水についてもですけど、IAEAが安全だと言っているわけではありません。科学的でも無い。知らされてない、報道されてないことがたくさんあります。それを、むのさんがおっしゃったように、報道が変われば、本当に知るべきことを知れば、支持率も変わるし、もしかしたら戦争も止められる。やはり国民の支持がなければ、なかなか戦争はできません。それ以前に予算をどう配分するか、そしてアメリカとの関係ですね。私たちの声が反映するように表現していくこと、それはいろんなやり方で、街頭のデモとか、選挙とか、マスコミや議会にあるいは議員にも申し出ていくこともできます。いろんなことができると思います。身近なところでも、できることやっていけばいいんです。でそれをできれば1人でもこれまで一人で結構やってきたんですが、つながって「これはおかしい」とあちこちで言うてくる、をやっついこうと思っています。すみません長くなって、以上です。(1:21:35~)

● S.N. (女性)

狛江市から来たS.N.と申します。「憲法を考える映画の会」で、2013年から上映会をやっています。この時に私たちに何ができてきたことなんですけど、私が考えたことをちょっと言おうと思います。

ひとつはですね、すごくアナログな方法なんですけど、人と話をするっていうことなんです。何か問題があるとすぐみんなでチラシを作ろうとか、そういう話になっちゃうんですけど、チラシは作って人に渡すことまでは出来るんですけど、読んでもらうかどうか言うのは、わかりませんよね。そういう方法が無効だとは言いませんけど、それと同時に身近な人と話すること、何でも良いです。今一番問題だと思っていること。戦争でもいいんですけど、つまりこちらの言うことをわかってもらうには、まず相手がどう考えてるかって言うことを聞く、そしてどう言ったらわかってもらえるかと工夫してそれでいろいろ試行錯誤を繰り返しながら、わかってもらえるように話をすることだと思ってるんですね。それであるところまで話を聞いたんですけど、人というのは自分の考えてることと違うことを聞いた時に、やっぱり受け付けないそうです。ところがですね5人から同じこと言われると「そうかな」って思い出さずって言うんですよ。ですので、それに希望を持って、その5人のうちの1人になるって言うつもりで、粘り強く本当に一日ひとりと話ができたら最高だと思ってるんですけど、そういうアナログな方法を使っても、考えはわかっていく、わかってもらえるように努力をしたらいいんじゃないかって私は思っています。

それからもう1つなんですけれども、地方自治にすごく希望を持っていますね。まあ1つは明石市長の泉さんこの方は非常に努力をされてましてまあ4期ですか、勤めてやめられましたが、非常に良い政策を次々に実行されてこられたんですね。例えば18歳までの医療費が無料であるとか、それから細かいところでは、離婚しますよね、そうするとお父さんとかが養育費を払うという取り決めになるんですけど、だいたい養育費を払わないで逃げるお父さんが非常に多い。それを市で肩代わりするというところまで、非常に細かいところまで、弱者に徹底的に寄り添う政策をされてきたんですよ。それで、明石市民の支持は絶大で、今日本で一番住みやすい地方都市になってると思うんですけども、選挙では圧勝ですよ。それで、私は泉さんの書いた本を読んで、本当にもう泣いたんですよ。政治の本を読んで涙が出たというのは生まれて初めてのことなんですけど、そのように市民のためにやっついけば自民も応援する。そして地方自治から国を変えていく、そのことも可能ではないかということです。

それであの1つの地方自治から国を変えていくという先行例なんですけど、「パートナーシップ制度」っていうのがあります。まして同性のパートナーに家族みたいな地位(?)を認められて事なんですけど、これ私の記憶が間違っていなければ、政令都市の過半数でそれ通ってるんですよ。それもその当事者たちが非常に粘り強い活動をしてこられて、そんな苦労話を聞いたことがありますけども、1つのやり方としてはまず議員に働きかけるんですが、自公から先に話を持ってくそうです。同じ自治体ですから自公の議員って言うても例えばその議員の孫が自分の孫と同じ小学校に通ってるとかですね、何かつながりはあるんですよ。そういうところから粘り強く入っていく。何で野党から話を先に持っていったらいけないかって言うのと、野党に話を持っていくと、それだけで自公は聞いてくれないことがあるって言うことなんです。野党はもっとフレキシブルで、政策がよければ、先に自公に話を持って行こうが賛成してもらえますよ。そんなふうな地方自治体、自分の住んでいる地方自治体から変えていくって言うことが、1つの可能性になるんじゃないかと思ってそんなことを考えました。以上です。(1:35:30~)

資料④ 第3回むのたけじ反戦塾（2023年7月6日）の記録（7）

● Y.S. (女性) 再

今、見たら、今年1月31日に本を出されてまして、「社会の変え方、日本の政治を諦めていたすべての人へ」と。私、社会変えるの無理かなとあきらめ、でもあきらめちゃいけないと思ってたんですけど、この本読みたいになりました。

● S.N. (女性) 再

その本見て泣いたの。「社会の変え方、日本の政治を諦めていたすべての人へ」と言う本だと思います。

● T.M. (女性)

すみません、勉強会にはとても参加する資格が無いものなんですけれども、とにかく勉強が嫌いで、ほんとに嫌なんですよね、ニュース見てるのも嫌、国会中継なんて見るとアホらしくって、だからみなさんすごいなと思うんです。ただ、感覚、何も詳しいことわかんないし、政治家の言ってることがどれが正しいとかそういうのも わかんないし それを検証する努力も私にはないんでただ感覚としておかしいよな 変だなっていう そのあれだけで動いて、動いてるのも要するにこう言うみなさんの集まりとか、デモがあったりとか、自分が動ける範囲で動いて、そういう映画をやっている、ドキュメンタリーを頑張って作っている人には、映画見たり、カンパしたり、ビデオ買ったりと、その程度の動きしか出来てません。

で、私は山梨から来てるんですが、ちょっと前に山梨の知事選がありまして、今の知事は リニア大賛成で、あの「甲府に空港を作ろう」と「何のための空港」だったら、そのリニアに金持ちが来るとその金持ちはセスナで来るからそのための空港が必要だと、そんなことを言っている人なんですけど、それに対して初めてリニア反対という対抗の人が出てきたんですよ、ところが惨敗です本当に。で、散歩仲間とか、私と同じようなレベルの人に「ひどいよね」って「ひどいよね」。でも「選挙行ったって一緒よ、変わらないわよ」という形でそういう人たちを説得するかも私は持ってないです。

で今ここ来る前に 中村哲さんの映画を、今ポレポレで再上映してて見て、「あ、やっぱり力だよな」力とかパワースが必要なんだよな、だから彼が生きている時は報道があって、あれしたけれども亡くなった後からの報道は足りないし、多分「選挙なんて」って言うてる人たちも、あの映画見れば涙するし、すごい感動すると思うんですよ。でもそれが、なんて言ったら良いのかな、だから今ウクライナの問題が起こった時に、何でウクライナだとこんなに報道されるんだろうと私 思ったんですよ。だってイスラエルとか、あそこらへんの中東だってずっと戦ってきて、それをドキュメントで、映画で出している人 いっぱいいるじゃないですか。でもこんなに取りあげられること無かったし、ソ連があれしてるってこんなになるってこと、戦争（報道）も力とかパワーというか、どうしたらいいんでしょう。教えて欲しいです。こう言う何位まで着ない奴が、これ以上何ができるのか、怖いことも嫌だし、官憲に捕まるのも嫌です、でも選挙だけで変わらないというのがすごく身にしみてわかってます。で、この頃はデモも無くなってきていますし、どこでどう参加したらよいか、そういう会があったら教えてほしい。ごめんね こんなこんな変な話ですけど。（1：41：15～）

● T.I. (男性) 再

涙を流した本の名前と出版社を教えてください。

●● S.N. (女性) 再

「社会の変え方」言う本です。出版社がですね、ライツ社（作者は？）泉房穂。

● K.S. (男性) 再

撫順の話、言われましたよね。あれは簡単に言ったら日本人の捕虜だった人たちに白いごはんを食べらしてくれたって言うことなんですよ。

● F.K. (男性) 再

1949年の10月に中華人民共和国が独立しましたね。その政権になった時の翌年、1950年にシベリア抑留の（60万人連れて行かれて約1割位が亡くなった）969名を日本に帰さないで中国に送り込んだわけですよ。連れて行かれたところが撫順監獄なんです。これは日本軍が満州支配した時に作った監獄で、その時に周恩来が「たとえ戦犯でも人間だ」「人格を尊重せよ」と言った。ところが中国の人たちは日本軍に殺されたり、酷い目に遭ってるから最初のうちはとまどいがあったそうです。撫順に入った部ものは食べさせる、殴るような扱いは無い、そういう向こうの一貫した指令が一切変わらないわけですね。……（すみません詳しい話の内容をご本人にもう一度聞いて、また後で記載します）

【「参加票」に寄せられた感想・意見】

■戦争に向かっている今の社会で、私たちは人権を蹂躪されていると思う。ひどい現実がまかり通っています。在日外国人も、赤ん坊も、子どもも、大人も、高齢者も…。今日は来て良かったです。いろいろな話を聞かせてもらいました。（M.I.）

■ひとり発言は2分でよい。ストップオッチで時間が来たら止める。（20分でも40分になる）（K.S.）

【みなさんの発言を書き起こして】

これまで4回の「むのたけじ反戦塾」での参加者のみなさんの発言を出来るだけ記録に残し、当日それぞれの会に参加できなかった人とも「共有」できるようにと、次の回「手元資料」に掲載させていただいてきました。

録音したもののから、話されていることを書き起こしていると、会場で直接、話を聞いてはずなのに、きちんと聞いていなかったと言うことを痛感します。

そして今回とくに強く感じたのは、みなさんがこの会でどのように話を進めたいと思っているか、とてもよくわかっている、ということです。

1回目や2回目の「反戦塾」では、自己紹介で「自分が今、どんなことをしているのか」、「どんなことを感じているのか」、「何とかしなくてはいけないと思っているが…」と嘆いているようなことが多かったのですが、今回の発言の中には、「具体的にどうしていったらよいか」に答えるものもいくつかありました。

たとえば、私たちは「よく若い人が来ない」と嘆いていましたが、OBとして大学の学園祭企画と一緒に立ち上げると言うアイデアは、それに答えるものでした。なるほど誰にも母校がある、そのつながりを役に立てると言う方法があると思ひあたりました。

たとえば、1972年の日中共同声明を読み直すという呼びかけ、たしかに国と国の約束として取り交わしたことが国民のものになっていないで、いま「台湾危機」とか言った「煽り」を鵜呑みにしているのではないか、そう思っている人にも、「日中共同声明ではこうした約束をしてたんだよ」とあらためて話して行くことができる。

そして「人に話すことが大事」という話、「自分の考えることと違うことを聞いた時に、やっぱり受け付けられない。ところが、5人から同じこと言われると『そうかな』って思い始める」話。行動を具体的に、「何をしたらよいか」を考えるご意見でした。

他にも他にも、たくさんのなるほどと思う具体的な「提案」がありました。書き起こしをしながら感動しました。また時間がたってから読み直し確認していきたい、そうした「資料」になればと思います。（花崎）

資料⑥ これからの「むのたけじ反戦塾」「憲法を考える映画の会」

次回 第6回 むのたけじ反戦塾

日時：2024年1月20日（土）13：30～16：30
会場：文京区民センター 3C会議室

これからの「むのたけじ反戦塾」

次回、「むのたけじ反戦塾」は上記のように来年の1月20日を予定しています。

今回は、2ページ目の「これからの『むのたけじ反戦塾』の工夫」にも書きましたが、参加者のみなさんといっしょに、どのような会にして行くか、あらためて話し合いたいと思います。

その先、だいたい2ヶ月に1回位の間隔で、8月には少し拡大した集まりが持てればと思っています。

地味ではあっても根気強く、続けて行きたいと思います。どうぞみなさんの希望をお聞かせ下さい。



次回 憲法を考える映画の会（第73回）

日時：2023年12月23日（土）13：30～16：30
会場：文京区民センター 3A会議室
映画：『流血の記録 砂川』
(1957年制作/56分/亀井文夫監督)

憲法を考える映画の会のご案内

憲法を考える映画の会は、2ヶ月に1回、この文京区民センターの3A会議室で行っています。

このところ一貫して、「むのたけじ反戦塾」と同じように、軍拡、戦争への道を歩もうとする今の状況をどのように変えていくかをテーマにしてきました。

今回は、日米安保についてあらためて考えていきたいと思ひ、戦後の基地闘争を映画で見たいと思ひます。

砂川闘争では、米軍基地を違憲とした伊達判決をめぐる、それを覆した最高裁の疑惑がいまも問題とされています。その裁判も続けられています。

横田・立川基地周辺のPFASの問題も、これからの問題です。

さらに戦後の米軍基地、自衛隊基地に対する基地闘争を、いまの沖縄、南西諸島につながる動きとして振り返ってきたいと思います。

そうした現在につながる、と言うか、戦争との関係で言えば、まさに戦後の私たちの生活を脅かす根源はどこにあるのか、考えて行きたいと思ひます。

「戦争を考える映画の会」はその後、2月に第74回、そして4月29日には吉祥寺の武蔵野公会堂に会場を移して「憲法映画祭2024」という形で映画と講演の会を行う予定です。

こちら「憲法を考える映画の会」も「むのたけじ反戦塾」とリンクして進んでいますので、どうぞご参加ください。またいろいろ考え、話が出る映画をご紹介します。

2023年外語祭特別企画「戦争と外大生」

日時：2023年11月22日（水）～26日（日）
会場：東京外国語大学（西武多摩川線 多磨駅下車5分）

第4回の「むのたけじ反戦塾」でK.Sさんのお話しにあった東京外国語大学の学園祭特別企画です。テーマは「戦争とが医大生 専攻語が『敵』の言語になった外大生の戦争と戦後」。メインイベントになる映画上映『ラーゲリより愛をこめて』は11月23日13時からで、ちょうどこの「むのたけじ反戦塾」とダブっていますが、特別展示は期間中307教室であります。

2023年度TUFS多文化共生活動「多文化共生への構造的暴力を考える」協力：株式会社アフリカポリテイア

2023年外語祭特別企画 戦争と外大生 3人の外大生から戦争を考える

企画① 映画上映『ラーゲリより愛をこめて』
11月23日（木・祝）13:00
要申込/定員：250名/会場：101講義室/134分
※ポスター左下のQRコードからお申込ください。

企画② ラウンドテーブル
11月23日（木・祝）15:30-17:00
要申込/定員：250名/会場：101講義室
『ラーゲリより愛をこめて』企画プロデューサー・平野隆氏（TBSテレビ）のレクチャーに続き、登壇学生が平野氏を囲んで映画について議論します。
※ポスター左下のQRコードからお申込ください。

企画③ 特別展示「戦争と外大生」
11月22日（水）～26日（日）
会場：研究講義棟3階307教室
以下の日程で特別映像の上映を行います（申込不要、直接会場へお越しください）。
ディスカッションの時間も設けます！
25日（土）13:00 講演動画上映：保阪正康（作家）「学徒出陣80年」
26日（日）13:00 DVD上映：『アンボンで何が裁かれたか』（スティーブ・ウォース監督/1990年）

イベント詳細&お申し込み
Exhibition & Movie Screening: (Former) TUFS students in WWII

150 東京外国語大学 創立150周年 記念事業

[MEMO]

とだ。事実をごま化して安楽の情性をむさほることだ。
 検索サイト・グーグルを見ると(二〇二二年四月一六日現在)、「資本主義の崩壊」は一三三万件だ。それなのに資本主義そのものでメシを食い、社会での地位を得ているその機構その組織は、まるで何ごともなかったツラで、これまでそのままの歩き続けている。マネーとマーケットがあれば、いつでもどこでも「アキナイは健在」という光景は続けられるけれど、そのゴマカシから何か生まれてくるか、何も生まれてこない。まさに、その状態こそが本物の死亡だ。その因果律を今後の社会生活のためにしっかりと確認しておく。

労働者の首切りという資本主義の罪悪

資本主義は、ともあれ幾つもの世紀をまたいで世界の経済を導いてきた。人々を苦しめたと同じ数だけの喜びを人々の生活にもたらしたことは確かだ。幕引きは、それに相当したものであるはずなのに、それがこわれた。資本主義が自分でこわした。

資本家と経営者、そして雇用されている労働者との相互関係は、経済が安定した時は

分の一、あるいは三分の一とされた。新聞社や出版社や放送局は、インタビューという労働に対して数万円を払っていたのに、それも私の了解を得ずにタダにした所が半数だった。
 そういう人間を軽んずるハートが続く最中に、例のリーマン・ショックだ。あの時、わずか一年先、いや半年先の経済状況も全く予見できない不安におびえながら、有名な大会社たちが何をやったか。いずれも何万人の規模という大きな数字を出した、労働者の首切りの予告でした。日ごろ大きな儲けを背景に立派なことを言う大規模な会社のそのハラワタは地べたにくっついてたまま、少しも近代化も脱皮もしていないことを自証しました。お互いに胸に刻んでおきましょう、人間の尊厳を殺すものは、何であれ必ずみじめに自滅する。

吸収できた。も一つは、政治の利用だ。建前では政治と経済の対等を言いながら、困ると政治にすがった。資本主義の大敵は不景気だ。儲けよう、儲かると思ってた大量に生産した品物が売れなくて大量にストックされると、やがて深刻な不景気になる。そこで政治を動かして軍事危機を増大させて戦争を起こさせた。もちろん大量のストックは間もなく消える。二〇世紀の歴史年表を見ると、この現象がほぼ一〇年ごとに繰り返されている。戦争は、二〇世紀に関して言えば、資本主義を救う手段として使われてきた。こう断定しても反論できる国家権力は、どこにもおるまい、恥というものを知らぬなら。
 ところが、二〇〇八年九月にアメリカの投資銀行リーマン・ブラザーズの破産で惹起された経済危機は、世界じゅうの株式市場のどこでも株価を三割から七割も暴落させた。リーマン・ブラザーズの求めた救いをアメリカ政府が断った途端に、世界じゅうが大不景気になるという予想に傾いたせいだ。現在の世界資本主義は、それほどまでに多くの矛盾を抱えて弱体となり、四本柱は自ら倒れかかっていたのだ。
 いま人類にとって肝心の問題は、一つの社会制度の末路なんかではない。死ぬものは死なせて、生まれてくるものを生まれさせればよい。よくないのは、事実をごま化すこ

* 20ページから14ページに遡る形で、後ろから左開き
 上段右上から左上 下段へ進む形でお読み下さい。

潜りかであった。けれど、多くの会社経営に赤信号のともった途端、経営陣は労働者の人数を経営操作の安全弁として用い始めた。働く大切な人たちを、機械・工具を増やしたり減らしたりするのと全く同じ感覚で扱い、首切りや賃下げが日常化した。とりわけ一九七〇年代から八〇年代にかけての成長の果実と思ったものが、実は水泡(バブル)だったと思いが知られた時、世界資本主義の主流に立つ連中は「新自由主義」という新しい旗を掲げ、利潤追求の新たな自由のためにと称しているいろいろな理屈を持ち出したが、その中心は人間の労働を出来るだけ安く買い叩くことだった。

そのころパート労働者たちの全国労働組合の学習会が秋田県大館市で催され、私は講演を求められて出かけた。パート労働と聞いて、私は年輩の女性たちが過半数かなと思っただけで、四五〇人の参加者は潑潑たる三〇代の男女でした。その一人が「実は、自分たちの給料は、会社経営のどの部門からどんな名義で出されているかを調べました。そしたら、経営項目のしっぽにある「雑費」からでした」と悲憤の涙をにじませて語るのを聞いたとき、老いた私でも老いの手を振り上げた。バブル崩壊当時の私の収入を打ち明けると、著作者として私の受け取る原稿料、講演料は私の了解なしにそれまでの二

分で提示して生き営んでいく、それによって人は人になる、それが人間みんなの一人ひとりの課題だ、と私は考える。

資本主義の四本柱が崩壊した

ここから資本主義の検討に入る。まず用語だ。資本主義と言ったとて、マルクス主義と同じように主義主張を言うものではない。実際の中身は「資本を主体とした経済活動のあり方」といったものですね。経済学では単に「自由経済」と呼ぶ場合が少なくない。コロンプスの航路開拓から現在に至る五世紀は、世界の隅々まで人間生活の中身を行き渡らせて成熟させた、まさにそういう時期だ。そのために人間の持つあらゆるものが動員され、注入され、その中軸にいつも資本主義が居た。だから一世を導く主義主張のように見えたので、キャピタリズム＝資本主義という呼び方がどこでも用いられて来たのである。はじめは規模のやや大きいアキナイといった形であつたらうが、活動の範囲と構造を成長させて、人類の経済活動の中軸となつた。

その構造は四本の柱を軸にしてきたと、私は解釈する。経済活動の目的と手段と場所、

する。資本制経済の本音は「国家サンよ、経済のことはおれたちにまかせておけ。うんと儲けて、うんと税金を入れてやるから、それでいいではないか。経済にはなるだけ干渉するな。自由経済は特に統制経済や計画経済が大嫌いなのだ」というところである。振り返れば、遠い古代から中世にかけて、地上のいたるところに王様の支配する王国が存在した。「王は支配する、しかし政治責任は一切負わない」という絶対君主制は、人民の反抗を抑えつづけるために法律と道徳というブレーキを人民に加えてきた。それに宗教集団が勢力を広げるにつれて君主制と抱きあつた。そして、信者への戒律を厳しくして、人民のエネルギーを拘束した。とりわけ欲望の拡大と自由の飛躍は、悪魔に負ける罪悪だと縛りつけた。そのナワを資本制経済は切り落として、人間のあらゆる欲望を解放した。自由への礼賛を大声で歌った。人々がそれを受け入れて、資本制経済が世の主流となつてきたことは当然であろう。

資本主義は、なるほど実に人間くさい経済だが、人間同様のヘマを時折やつた。クライシス(危機)にもパニック(恐慌)にも出会つた。大概の場合、四本柱の一本またはせいぜい二本の行き詰まりが原因だつたから、他の柱が強く働き、困難を内部矛盾として

主義だと罵倒して、自分たちのものは科学的社会主義だと言い、階級敵に対する憎悪をかき立て、それを自分たちの社会運動の性格とした。その影響は深かつたのであるまいか。

二〇歳前後の私は、社会運動との接触は浅いものであつたのに、それでも「憎しみのつぼ」という歌を覚えていた。いつどこで誰たちに習つたかは全く思い出せないが、メロディーをつけて、「憎しみのルツボに赤く焼くクロガネのツルギを打ち鍛えよ」と老いの果てのいまでも歌える。憎しみというものは本当に執念深いものですな。ロシア革命でロマノフ王朝の血縁者を捜し出して、骨片の一つも残らぬように始末した時のやり方は、セイサン(凄惨)なんていう程度ではなかつたようですね。憎しみは、それを切断して葬らない限り増殖する。スターリン時代のソ連政府の人民に対する秘密警察の弾圧は、今にして思えば、ロシア社会主義の何とも形容しがたい自殺、自滅への約束手形でしたな。

人と人との結び付きで何が望まれるか。薄っぺらな愛ちゃんでもなければ、人のハートを凍らせる憎しみでもない。では何だ。この問いに、人間として人間らしい答えを自

* 20ページから14ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上下段へ進む形でお読み下さい。

そして国家権力との関係です。

(一)資本主義の目的は、儲けることである。儲けるために働くのだ。人類の生産活動は、自給自足の長い年月が続いた。次に注文に応じて生産する形態がいろいろと続いたあと、資本主義が初めて「利潤の追求」をその目的として掲げた。儲かることなら何でもする。儲けにならぬ事は指一本だつて動かさない。それが資本主義の血液型だ。だから熊本の水保病事件のように、毒水を漁業の海に平気で垂れ流す行為が続いた。儲からないことに手を出すのは慈善事業であつて、資本主義とは無縁だ。

(二)望めば万人の誰でも経済活動に参加できる。活動の企画、実行、処理、宣伝などは、法律に違反しない限り自由が保障される。

(三)資金を調達する証券市場、造る者と売る者と買う者とを結び合わせる商品市場、地上のどの国家・地域とも相互に結合させる貿易市場など各種のマーケットが資本制経済の働きを保障して成長させてきた。

(四)いかなる国内情勢でも、経済活動は政治に拘束されて監視される。資本制経済も外観はその通りであるが、国家権力と不即不離、つかず離れず対等の関係を保つように

と、どうなったか。やることなすことは、資本主義を裏返しにした発想にとどまって、それを階級敵への憎しみを煽動して補うだけだった。だから社会経済の動向を判断する大切な尺度は資本主義国と同じGDP(国内総生産)を基準に同じ方式の判断を繰り返した。だからどうなったか。社会主義体制の内部に発生した矛盾を支えきれなくなった時、階級敵として戦ってきた資本主義へコロリと反転したわけだ。

(三)ソシアリズムⅡ社会主義の最大の特性は、新しいソサエティ(社会)づくりを目指すもので、ネーション(国家)の否定だ。それなのに「ソビエト社会主義共和国連邦」「中華人民共和国」だ。これでは、汽車でよそへ行く切符を買いながら、出発駅のプラットホームで座り続けているみたいではないか。

(四)ロシア共産党そして中国共産党の革命運動は、人民大衆の決起した人民運動の装いをしていて、そのように見えたが、中身は肝心のところで異なっていた。レーニンも毛沢東も、帝国体制による残酷な圧迫の中で社会運動に入った。だから革命運動は「職業的革命家集団」が中核となって、そうでないと進めることが出来なかった。「人民の友」とは何か」などの著作で人民の決起を促したが、現実には、共産党による一党独裁

れじゃ新ロマノフか新しい清朝ではないか」と。

革命家と自称した人々ですら誘い込む毒が、権力そのものにあるのかな。それならば、人間生活から日没と停電による以外の暗黒を除去しようとしたら、どのような性質のものであろうと、一切の権力を人間の世界から放逐しないといけません。

一党独裁の問題ですが、一個の政治集団、その党員たちだけで一国を支配する姿は、現在でも今後にも人間界に許されるわけがない。この一事をどう処理するかで、中国の将来は決まるのである。

(六)世界各地の社会主義運動は、日本だけを例外として「戦争を通じて革命へ」を運動方針の一つとして来た。戦争の実体は、誰がどのように美化しようと、対立する両勢力が相手を出るだけ早く出来るだけ多く抹殺しようとする大量殺戮のゲームだ。そういう手段で人々の喜びや幸せが保証されるわけがない。因果応報で、そいつは自滅するな、必ず。

(七)一九世紀の初めに芽生えた社会主義は、人道主義、友愛平等、共存共栄、といったあこがれから出発した。それをマルクス主義は、ユートピア社会主義だ、観念的社会

(一)当事者たちが社会主義革命だと叫んで現実のロシアそして中国に進展させた社会運動は、その行動を導いたマルクス主義の思想そのものからすれば、そこには起こるはずの無かったものだった。マルクス主義によれば、資本主義の社会体制が発展して成熟すれば、そこに必ず大きな社会矛盾が出て来て社会主義の体制に移っていく、移らざるを得ないという判断だ。「資本論」を共著したマルクスとエンゲルスが予想した最初の社会主義国は、ドイツかフランスまたはイギリスであつたらう。資本主義の歩みが始まったばかりのロシアあるいは中国に社会主義が繁るわけがなかった。たとえて言えば、小学校を卒業したばかりの子どもが突然変異のように大学に進んだ。そして矢張りムリです、中学校そして高校で学んできなさい、と突き返されたような事情が舞台にあつたのだから。歴史の歩みを階段の歩みにたとえれば、やっぱり登るべき段は一個ずつしっかりと踏み固めて登って行かなくてはいけないのだ。

(二)レーニン、毛沢東たちが社会運動に着手した当時、社会主義の内容は何であつて、どのような社会構造や政治と経済を造るのか、検討は極めて不十分だった。資本主義を打倒せよ、打倒すれば素晴らしい世の中になる、という底の浅い社会運動だった。する

* 20ページから14ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

を強めて、人民のエネルギーを抑圧した。それがレーニンたちであり、すべての共産党員だった。すると、どうなるか。

「解放」には二つの性格がある。自分を縛りつけているクサリを自分で断ち切つてわが身を自由にする、が一つ。もう一つは「解き放ちやる」だ。クサリにつながれている人を見て、他の人がクサリを解いて自由にしてあげるのだ。中国共産党そしてロシア共産党と、それぞれの人民大衆との関係は「解き放ちやる」と「解き放つてもらう」との関係だった。その隙間は深い。世の有様が変化して半世紀を超えると、隙間から何が出てくるか。常識でも解りませぬ。

(五)旧権力を悪魔と罵倒して戦つて目的を遂げた勢力が途端に新権力となり、やがて旧権力と大差のないものが、そっくりのものになったみじめな喜劇が、人類史の過去に幾つもあつた。私は、レーニンさんよ、毛沢東さんよ、と何度も語りかけたことがある。「あなた方が社会の指導権を握つた時に、何故に政府のオフィスやあなたがたの住居を、東京で言うならば、例えば浅草界隈のような一般住民の居住地のど真ん中に持つていかなかったのか。なにゆえに東京ならば二重橋の内側みたいな所に腰を下ろしたのか。そ

あくまで現実そのものを直視して現実の対策を講じなければならぬ。そういう努力を先輩たちはやってきたか。

いま国家のどこもが民主主義の政治を建前としているが、実際の中身は間接デモクラシーというものですな。国民は数年に一度の割で投票場に足を運んで、小片に他人の名を書いて箱に入れる。国家の主権者とされる人々の中身はそれに過ぎない。そして投票と引き替えに納税令書を受け取らされる。投票率が三〇パーセントそこで、主権者の七割が投票しなくとも、それで主権者全体の意思が表現されたことになる。そして選ばれた議員たちによって議院が構成される。そこでの審判は多数決だ。意見が五一パーセント対四九パーセントの対立となれば、四九パーセントの民意は敗北者となって否定される。そういう議院から生まれる議員内閣制が本物の人民主権・人間尊重の政治を実現できるわけがありませんな。

社会主義の失敗が残した教訓

ここで社会主義、そして資本主義の末路に診断を下す時だ。まず社会主義ですが、ソ連体制に異変の到来を予想した文章は、戦後にたった一つ見た切りだ。フランスの女性の社会学者の「ソ連邦の総人口の二割がやがてイスラム教徒になるが、その時には政治体制の深い所に変化を来す」という予想だ。中華人民共和国の政治体制にひび割れを予想した言葉は、全く見たことがない。両国とも少なくとも二三世紀や二四世紀までは世界政治に大きな影響を及ぼし続ける、と社会主義嫌いの人ほどそう思ったのではあるまいか。それが二〇世紀のまだ終わらないうちに、しかも事もあろうに資本主義体制に反転するなんて、おかしすぎはしないか。

当然のこと、なぜそうなったのかについて、人間だれもが真剣に検討して学び合うはずなのに、その動きが出てこない。何よりも社会主義の権力を行使した人々、その権力に支配された何億もの人々が、まるで三匹のサルみたいな態度を続けているのは全く腑に落ちませんな。

ここで個人の事を持ち出す。私個人のことを言いつつ、ソ・中両国の社会主義の末路に私の診断を下す。聞いて下さい。一七歳（一九三三年）の春に東京の学校に進んだ。その時に私の胸中にあった社会意識は一つ、貧富の対立でした。私の父も母も肉体労働の

* 20ページから14ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上 下段へ進む形でお読み下さい。

一生でしたが、まじめに勤勉に働いて家族を養うのが精一杯だった。そんな日本人たちが一杯いる他方には、ラクをして贅沢に暮らしている日本人たちが一杯いる、おかしんじゃないか、こんなおかしいことは許せない、という怒りを持っていましたな。この思いは、東京に出てあれこれを見聞きするにつれて強くなった。

そんな私にたくさんの親友ができた。神田神保町に積まれて並んでいた古本たちです。通学していた校舎から一〇分そこそこで行けるその町では、発売禁止本までも含めて、読みたい本を探して、高くない値段で入手できた。他の市街の古本屋で価値の高い本に安い値札の付いているのを見つけて、それを買って神保町の本屋に売って、そこで新しい本を買うことも覚えた。

そして、何が起ったか。ウラジーミル・イリイチ・レーニン（本名はウリヤノフ）という人間に心を惹かれた。四五歳も年長の外国の死亡者なのに、隣村に住む兄貴分みたいに感じた。妻のクループスカヤは社会教育に熱心だったそうですが、彼女にも親近感を覚えた。そして一八歳の夏の私は、大空に向かって、「おれは社会主義者だ」と大声で叫んでいた。二一歳で新聞記者になって読書範囲が広がり、毛沢東という中国人に

対して、レーニンに対するとそっくりの思いを持った。二人の革命家に対する私の思いは、当時まだ女性への恋愛を知らなかった私は、恋心とはこんなものかと顔を赤らめたものでした。

レーニンと毛沢東、それぞれ命をかけた革命事業は滑稽過ぎてマンガにも成らぬ結末に落下してしまっただが、兩人に対して若い日に抱いた思いは九六歳の今もそっくりそのままだ。会えるものなら、生きて二人と対面して、腹の底から笑い合い、語り合いたい。やっぱりこの心情は恋ですね。途中で心変わりしたの、裏切ったのと騒ぐのは、恋でも愛でも屁でもない。イヌネコのサカリと同じヒトのサカリだな。

現在の私は、レーニンにも毛沢東にも感謝している。彼らの残した失敗、その中に含まれている教訓は、いまを生きつつある現代人のわれわれにとって貴重な教材、指針だと思う。

それでは、ソ・中両国の社会主義体制の崩れた理由について、私の診断を提示します。簡条書きにする。私の思いが入り組んでいるために、わかりにくいものの言い方になるのを防ぐためです。

帯をはめて、カギは自分でもって出掛けたことでも想像される。そんなところで「人間第一」「男女平等」の思想が育つわけはありません。

ここで自己反省を込めて人々に強く言いたい。コトバを厳しく大切にしましょう、とコトバを運ぶ便利な道具が普及したせいもあるが、余りにも安直な態度で言葉を扱っていないか。私はヒューマニズムという単語をその字柄と語感だけで肯定して、そのままで言ったり書いたりして来た。何十年も言葉の職人みたいな仕事をしてきて、しかも横文字が専門の学校に四年も通って、ラテン語にも相応の知識を持っていたのに、それを用いてヒューマニズムの成り立ちを吟味することもしなかった。少し手間をかければ解ることだが、ヒューマニズムはただの抽象語ではない。ナマの歴史語だ。

古代のローマ人は、人間を二つに分けて考えていた。一つは教養が低くて下品な異邦人、すなわちホモ・バルバルス(= homo barbarus)で、もう一つはギリシャの教養を受け継いだ文明人のローマ人たち、ホモ・フマヌス(人間らしい人間)である。そしてイギリス人が英語でヒューマニズムを言い出したのは一七世紀からで、そのころイギリス人たちは各地での戦争で蛮勇を振るい、敵たちの首を足で蹴って遊んだのがサッカーの始

まりとされた時代だ。そんな社会環境の中でイギリス人の口にしたヒューマニズムは「万民平等」でも「人権尊重」でもなく、人間らしい人間はどんな条件を満たさねばならぬか、その姿を描いたものだったという。答えは女性でなく男性、貧者ではなく富める者、病人ではなく健康人、老人でも青少年でもなく四〇歳前後、そして無能弱者ではなく強くて勇ましい者だ。彼らの口にしたヒューマニズムは人間を差別して、ある者たちに辱めを加える記号だったのだ。このようにナマの歴史をたどってみると、フランス革命が「自由・平等・友愛」のスローガンを全世界に広めて二〇〇年も経過したが、本物の自由、本物の平等そして本物の友愛のどれもまだ地上のどこにも成立していない現実、否応なしに認めざるを得ません。

ふと思い出したが、ベトナム戦争の報道で活躍したカメラマンの岡村昭彦君が、三〇年前に私をテストした。「パリの公園で美しいパリ女性と黒人の青年が熱烈にキスをしているのを、まわりのフランス人たちが当たり前のように見ているのを見て、フランス革命が実を結んだと思うか」と。私がフランスの上を歩いた経験は少ないから、答えなかった。すると岡村君は言った。「パリジェンヌと黒人青年とのキスを見ているフランス人たちは何も言わずに心の中で、外を歩けば、犬に小便を引っかけられることもあるさ」と思っているだけだよ」と。岡村君はフランス革命の精神が根づいてないことを言おうとしたと思うが、それなら何故にこのオレより一四歳も若いのに一九八五年に早々と死んだのか。亡友よ、ねむるな。見ておれよ、戦いは、君の愛したアジアから、アフリカから既に始まっている。

間接デモクラシーは民意に背く

「デモクラシー」が現実の響きを伴って人々の胸にこだまし始めたのも、まさに一六一七世紀からで、それに拍車をかけたのは産業革命であり、フランス革命でした。それなのに、デモクラシーやヒューマニズムを古代のギリシャや古代ローマにつなげたがるのはなぜか。まさに近代は中世の絶対君主制と宗教の権威と真っ向から対立したから、そこを超えた古代と結びつけて自分らの存在を重くしたかったのではないか。そうだとしたら、理想につながるものや社会の仕組みを対象として検討する時には、言葉の持つ美しい響きに自分からうっとりとする愚かさは厳しく切り捨てねばなるまい。

いか、検討を進めていく。

「ヒューマニズム」はラテン語のフマニタス(= humanitas)(人間らしさ)から来たもので、「デモクラシー」はギリシャ語の人民(= demos)と権力(= kratos)を意味する単語をくっつけたものというのが通説だ。こうした思想は、うんと古い時代から存在したような装飾をするつもりなら、とんでもありません。古代のギリシャやローマには万人平等も人間尊重もなかった。ローマの第一の観光名所は古代の競技場で、そこでは猛獣と奴隷を戦わせてローマの自由人たちは酒を飲みながら見て喜んでた。

古代ギリシャも同様、というよりもっとひどかった。近代オリンピックが古代のそれを復活させて一八九六年にアテネに催された時は、創始者クーベルタンの「あくまで古代そのまま」との意思で一四か国から参加した二八〇人だけで催された。男性ばかりであった。古代ギリシャでは、女性が人前でスポーツをするなんてとんでもなかった。理由は素肌を夫以外の男に見せるなんてトンデモナイ。何よりも体を激しく動かせば妊娠や出産に支障を来すかも知れないからだ。当時の女性は男性の愛玩物であり出産具だった。中世において男も女も戦争に出掛ける時には、自分の妻もしくは愛人に鉄製の貞操

* 20ページから14ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上 下段へ進む形でお読み下さい。

に救いの手を差し伸べた。東光会という名の子供会を作って、時々講話会や楽しみ会を催し、寺の一角に文庫を設けた。いろんな雑誌や書物を混ぜて何百冊かが並べられて、どの子も好き勝手に読めた。そのうち外部から本を寄贈する人もあって、とにかく子どもたちは、それらを好きなように読みあさった。私もその一人で、気がついたら何かにつけて、なんとということもないのに「ユートピア」と発音していた。すると心が澄んで、元気が出てくる気分になった。

当時の世の有様を思い返せば、私の小学上級生は一九二六―二七年ですが、そのころになって一九世紀の思潮の波紋が日本列島の片隅に届いた、ということではないだろう。一九世紀の有様を退廃や墮落といった言葉で形容する人たちがいるが、そういう社会事情が重なっていただけに、理想郷への期待、あこがれに突き動かされながら、退廃や墮落までも試してみたのではなかったか。それだけに二〇世紀への期待は、悲壮なほど突き詰めたものではなかったろうか。

少年期の私の読書体験は貧しかったのに、それでもとても大切な一つの英単語を脳に刻みつけたのは、なぜだ。二つの思いがこみ上げてくる。それを他の人たちにも伝えた

ラシー、社会主義、そして資本主義です。その哲学と倫理の提唱者たち、その制度や事業の開拓者たちは、種々の歴史書にその名を星の列のように刻んでいるけれど、どれも実を結ぶに至らず、空転または崩壊しているではないか。なぜなのか。何が原因か。そこをまっすぐに抉り出して正解すれば、それこそは、まさに人類がこれから取り組まねばならぬ第三革命への道標そのものではないだろうか。

もう一つ私の予感を言う。これは、私が歴史学について全くの素人だから、だからこんな予感を持つのかも知れないが、聞いてもらいます。

「自由・平等・友愛」はどこにも成立していない

人の生き方、世の組み立てについて無数の提唱、実践が重ねられてきて、どれもこれも失敗したのは、求められている正解の自身がそれほど至難で複雑で多量であるからだと考えるのが通例であろうが、実際はその反対ではないか。求められている正解は、実は少なく容易で単純な内容ではあるまいか。だから、かえって人々はそれに気付かないで、見過ごしてきたのではないのか。私のこの予感もしくは推測が当たるか当たらない

らゆる可能性を試したと言えよう。そして、人類の長い繁栄を保証すると見えた思想の道しるべと、経済の土台が用意されたように見えた。デモクラシーとヒューマニズムは、どこの国の憲法にも腰を据え、資本主義は国家を家来のように扱って世界中で働き続けた。対抗勢力として社会主義が台頭し、その国家までも登場した。ここに至る一八世紀以来の歩みは、他方にくいくつもの暗い問題を抱えながらも、人類に希望のようなものを感じさせて抱かせたのではなかったか。

ここでちよいと道草を一本食べよう。私の小学生当時、教科書以外の印刷物を買ってもらったのは一回切りでした。一年生の夏にハシカにかかった時に父親が「譚海」という雑誌を買ってきてくれた時だけです。そういう私が最初に覚えた英単語は何だと思えますか。「ユートピア」でした。あとで東京外語に学んだ時に小学生当時の私のユートピアという発音を吟味したら、「ト」にアクセントが置かれ、作法にはまつていて我ながら感心しました。

私の生まれ所は東北農村の一つで、人口は一万足らずで寺院は三〇を数えた。その一つ、本覚寺の土田善静という住職が、地域の子らの遊びにも学習にも思えない状態

* 20ページから14ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

い。一つは、一六世紀以来の足かけ五世紀にわたってヨーロッパに渦巻いたものは、まさに人類の第二革命だったと思います。革命とは、文字を見るだけでも「いのち(命)をあらた(革)める」深さと激しさを持つものでしょう。第一革命は約一万年前の農耕の開始であって、そこから始まった人類の努力は、さまざまの道をたどりながら、一語で言えばユートピアへの渴望、そこへの挑戦となったと私は判断します。それは実に深く強いあこがれであったから、長い旅路と長い時間を重ねて日本列島の一少年の胸にまで届いて、宿って「ユートピア」と発音させたのだと判断します。

地球は、その形だけでなく心も丸い球だ。人間たちのまっとうで強い思いは、世界じゅうのどの人々にも届く。届けることができる。その可能性は、過去よりも現代はもっと強まって進んでいる。この列島の一隅での私どもの営み、願いと働きは世界のどこの人たちとも結び合って合作できるのだという喜びのようなもの、それがユートピアという言葉がこの本の中に持ち出したもう一つの思いです。

では、人類をこの数世紀の歩みで励ましてきた道標は何であったか。私の答えは、あくまでも一生活者としての検討によるものですが、四つです。ヒューマニズム、デモク

資料⑥ 「希望は絶望のど真ん中に」 第3章 人類の余命は40億年か40年か (1)

第3章 人類の余命は40億年か40年か

この本のいのちである二つの問いに、ここで対面する。(一)私たち人間みんな「人類は、いまどのような歴史状態の中に身を置いているか。何を問われていて、それに対して何をどのように答えねばならないか。(二)その答えを自分のライフ(生命・生活・生涯)にどのように生き貫いていくか。

いまは西暦二〇二一年になって四か月しかたっていないませんが、「世の中は根本から変わる時、変えねばならぬ時に来ているのではないか」という声をしばしば耳にするようになった。海外ではアフリカやアジアの諸国に市民革命の続発を思わせるような民衆の行動が連鎖し、国内では東日本地域の大震災、それによってむき出しにされた産業構造の内部の腐敗、政治の無責任な出鱈目、そして科学・技術の不道德な退廃を見せつけられたことに対する真面目な反応でしょう。

私個人のことを言えば、一九九〇年代の半ば、八〇歳のころから「人類の歴史は、前半が終わって、これから後半に入りつつあるのではないか」「そうだとすると、人類史

95

第三章 人類の余命は四〇億年か四〇年か



* 20ページから14ページに遡る形で、後ろから左開き
上段右上から左上、下段へ進む形でお読み下さい。

第3章 人類の余命は40億年か40年か

在のような生き方で、現在のような社会構造の中で生き続けて、それで生命のバトン・タッチはいつまで続き得ると思えますか、と問いたい。この問いに私自身は「絶望」と答える。だからこそ「希望が燃え立つ」と私の思想は叫ぶのです。

今日以降をまともな生き歩みなければ、今日までの過去の歩みに学ばねばならぬと、この本の前半で、人類の歩みを農耕と戦争の二つを軸にして見詰め直しました。そして、コロンブスの大航海から二〇世紀に至る五世紀はワンセットに受け止め得るという思いを持ちましたが、そのような歴史処理は間違っているとは言えない。

コロンブスの航海はスペイン女王の援助を受けてのことだったようですが、その航海のもたらした経済利益の証明はヨーロッパにブルジョワ階級を生まれさせ、やがてあちこちの王政をぶっ倒す市民革命を続発させた。カオス(混沌)はものを産む圃場(せうじょう)ですが、ヨーロッパは、まさにその状態に突き進んでいった。一八世紀からイギリスを中心に強く歩み出した産業革命、一七八九年を中心に絶対王制から市民社会へと歩みを進めさせたフランス革命、それらの記録を読むと、出来事は日本ともアジア大陸ともじかにはつながっていないけれど、血の騒ぎを覚えます。人間の持つ知恵、能力を総動員して、あ

97

の前半は七〇〇万年の長さだが、後半は？」といった想念に取りつかれるようになった。そして存在もしない光景が見えて、存在もしない音が聞こえた。巨大な絨緞(じゅうとん)のようなものが、ゆるやかに地面を匍(は)つて来て、突然に烈風に巻き上げられ、そこで反転して地面に落ちて、新しい方向へ動き出した。その時の地鳴りのこだまするような音が聞こえたのです。このおれも相当に老いばれたらしい、老痴ゆえのマボロシを見たり聞いたりする、と苦笑した経験も恥もなく、こうして書いてあなたに打ち明けるのは、何がどうあるうが、あるまいが、人類の歴史は今ここで土台から変わる時、変えねばならぬ時だという判断はその通りだと思うからです。

それだけではない。ならば人類の後半の生命の長さ、余命はいくらかと問われたら、「それは最長と最短のどれをも人類が自分で選べる。四〇億年か、それともたった四〇年か」と答える。答えるしかないのが私の現状です。

ユートピアの夢から四本の道標へ

私の判断は極端に走りすぎている、と思う人へ問いたい。では、人類のあらましが現

96